

317  
376



始



特 230  
839



文學士 北島霞江 著

十六夜、更科、紫式部日記

立川書店發行



## 緒言

此の書は鎌倉時代の十六夜日記と、平安朝の更級日記と紫式部日記とを収めた。時代から言へば、其の逆であるけれども、修學者の方から見て、其の解釋の難易から言へば、本書収録の順序に従うたのが便利である。そして抄本の材料選擇の當非と、丸本の材料過多の弊とに鑑みて、其の二點を考慮して、しかも丸本に編んだことは本書の特徴とする所である。

○十六夜日記は藤原定家の子で、その歌道の門閥二條家を襲いだ爲家の後妻阿佛尼の作で、爲家の歿後、和歌所邑播州細川庄の事に就き、先妻の子爲氏と、作者の所

生の爲相との間に争奪があり、爲に作者は爲相の爲に之を鎌倉幕府に訴へむとて、自ら建治三年秋京を發して東下した時の日記であるから、世に阿佛道行とも稱せられて居る。日記は三段に分れて居つて、其の前段ともいふべきは、孝道の事に筆を起し、爲家の遺書、賢王の政道、歌道のことからわが家柄采地のことを叙べ、子を思ふ心の切なる情に關東下向の已むなきに至つて、五人の子との訣別することを綿々と記して居る。其の中段は東海道の旅行記で、粟田口の別れから、近江路の秋、不破の關屋の時雨、一宮、鳴海、八橋の名所、さては濱名、宇津の山、富士の眺めなどに、何れも哀愁の情を抒べ、箱根の險を越えて鎌倉に入るまで、路次の風物に吟詠を以て

感慨を遣り、後段に至つて、鎌倉滯在中の思ひ出や、都の人々との消息や、贈答歌を列ねて、最後に長歌一首を添へて居る。その十六夜日記といふのは、近江の守山を出づる日が十六夜であり、又宇津の山にて行き合つた山伏に托した京への消息の返し事に、その十六夜の事が繰返してあるによつてであらう。

訴訟は作者の鎌倉に下つた時、恰も元寇の大事件があつた爲に涉らず、其の結末を見るに及ばずして弘安六年九月鎌倉で客死し、其の後、爲相の勝に歸したのである。文は平板着實の散文的分子が多いが、簡結勁健の趣はあり、子を思ふ女大夫の意氣は紙面に溢れて居る。

○更級日記は菅原道真五世の孫なる菅原孝標の女の作であつて、父が上總介としての任地から、期が満ちて上京する時、即ち寛仁四年、作者が十三歳の秋から筆を起し、五十一歳で、康平元年十月に夫の橘俊通と死別するまで、凡四十年間のことを記した日記である。

此の日記は恐らく夫の死後、靜かに其の過去の生活を想ひ起して認めたまのらしく、東海道の道中日記の前後は連続したものであるが、其の後のものは、斷片的に記したものであつて、東海道旅行の記事には地名の錯誤などが數ヶ所ある。其の主なる記事は、一、上總から京への旅行記、二、歸京後の家庭生活、三、宮仕に關すること、四、結婚以後の生活、と四段に分たれるもので、其

の間に終始一貫して居るものは、作者の自我の強い幻想的な性情と、文藝小説の熱愛とで、作者は常にそれに表はれた空想の境地に憧がれたが、神佛の信仰は夢幻の中に幾多の暗示を得ながら、その自我の強さの爲に心から歸依することの終に出来なかつたことである。

併しこの作者には清少納言の驕慢と紫式部の矜持とはなかつた。感傷的で、又消極的な感情は、實際生活に於て、常に運命に對して従順で、骨肉に對して犠牲的であつた。

夫の死後に於て、作者の此の消極的な性質は殊に著しく顯はれて、入り得なかつた信仰や、強い自我の生活に對する悔悟から、悲しい寂しい日を送つて居る。

此の如き内容を有つ此の日記は恐らく平安朝期の日記中に於て、最も他に例のない特徴を多分に有するもので、又最も興味ある女性の描寫である。

この日記を更級日記といふのは夫の俊道の住國が信濃であつたことや、其の終りの方にある「月も出でて闇にくれたるをばすてに云々」の歌などによつて思ひ寄せた名であらう。

○紫式部日記は更級日記より稍遡つた時代に、源氏物語の作者、藤原宣孝女紫式部の作であつて、式部が一條天皇の中宮彰子―藤原道長の女―に宮仕へした當時、その中宮が御産の爲に、土御門の道長の第に下られて居つ

た、寛弘五年の秋から冬に渡る皇子御降誕前後のことを最も詳細に記し、翌六年の正月と、七年の正月三ケ日及び第三皇子―この中宮には第二皇子―の五十日の御祝儀のことに及び、其の間の六年と七年との記事の間に同僚女官の容姿及び齋院に仕ふる女性の才能を批評して、まゝ自己の述懐感想を述べた消息文らしいものが交つて居る。

此の文に見るべきは、當時の宮中の御産に於る祈禱の仰々しさや、其の儀式であり、又その消息文に於て式部の性格を最もよく窺ひ知るに足ることであつて、源氏物語を繙く者の、その作者を知る爲に必ず先づ一讀すべきものであらう。

八  
文は難解ながらに、其の精緻な筆致から當時の状景や、作者の所感を明かに捉へることが出来る。唯憾むらくは今日傳る部分が抄録か、脱漏か、全體に亘つて詳略區々で、一貫した状景や、思想を知り難いことである。

### 目次

## 十六夜日記

一 旅立	一
二 東路	三
三 月影の谷	五
四 枕の浪	三
五 夜の鶴	四〇

## 更科日記

一 かとで	五
二 武藏野	五

目次

二

三	足柄山	六二
四	富士の山	六五
五	遠江より近江へ	六七
六	都がへり	七一
七	紫のゆかり	七五
八	月夜の猫	七九
九	火の事	八二
一〇	ひがし山	八八
一一	あらましごと	九三
一二	はかなき別れ	九六
一三	鏡のかけ	一〇〇
一四	宮づかへ(其の一)	一〇五
一五	宮づかへ(其の二)	一〇九
一六	春秋のさだめ	一一六

紫式部日記

一七	初瀬詣	一二五
一八	人だま	一三九
一九	佛陀來迎	一四三

一	秋のけはひ	一四七
二	女郎花	一五一
三	とのみ	一五二
四	辨の牽相	一五三
五	菊の露	一五四
六	御祈禱	一五八
七	御受戒	一六八
八	朝日の光	一六三
九	望月	一七〇



一〇 おほやけの御産養……………一七六

一一 うつくしみ……………一七九

一二 みゆき……………一八〇

一三 いかの御祝……………一九三

一四 宮の御さうし……………二〇〇

一五 水のうきね……………二〇二

一六 還 御……………二〇六

一七 師 走……………二〇七

一八 あげつらひ……………二二三

一九 式部之少納言……………二三四

二〇 日本紀の局……………二四三

二一 たしく水雞……………二四九

二二 野べの小松……………二五一

— 目 次 終 —

# 十六夜日記

## 一 旅 立

昔壁の中よりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世  
 の人の子は夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。  
 みづぐきの岡の葛葉かへすくも書きおく跡たしかなれ  
 ども かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人を  
 捨て給はぬ政にももれ、忠臣の世を思ふなさけにも捨て  
 らるるものは、數ならぬ身一つなりけりと思ひ知りなが  
 ら、又さてしもあらで、猶この憂こそやる方なく悲しけ  
 れ。

一 古文孝經。孔安國の序。魯恭王使八人壞壁。夫子講堂於壁中。石函得古文孝經二十二章。二 水草とは筆のことなれど、岡の枕詞にも用ふ。岡の葛葉は風の裏かへるも、故「かへす」の字に「かへす」の筆に「かへす」の字の意かへたる文字の意に重用したるなり。三 播磨國加古郡

細川庄を爲相に  
讀るべき爲家の  
遺言狀。

四 古語拾遺に

あはれあなのおも  
しろあなのおも  
しあなのおも  
やけと萬葉假  
名にて書かれた

五 紀貫之古今集

れかして天地を見  
動かし鬼神をもあ  
えぬ鬼神をもあ  
はれと思はせ、

六 藤原定家新

るは歌なりと。  
ふの心をも慰む  
げ、猛きもの

七 後撰集及新

今集を撰す。古  
後撰集及び續  
集の爲相、爲  
關守。但し爲顯

九八 爲家の遺言。細川の庄を領したればなり。

藤原兼輔一人の  
親の心は闇にあ  
らねども子を思  
ふ道にまどひぬ  
るかな。

一 古今集、雜

一 文屋の康秀が  
三河の掾になり  
てあがた見には  
え出でた見には  
といひやれりけ  
る返事によめ  
る。佐野小町。  
を浮草の根をた  
えて誘ふ水あら  
ばいなむとぞ  
思ふ。

二 伊勢物語、昔男ありけり。

更に思ひつづくればやまと歌の道はたゞ實すくなく、  
あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日本の國  
に、天の岩戸開けし時、四方の神たちの神樂の詞をはじ  
めて、世を治め物を和ぐるなかだちとなりにけるとぞ、  
この道のひじりたちは記しおかれたりける。さてもまた  
集を撰ぶ人はためし多かれど、二たび勅を受けて、世々  
に聞え上げたるはたぐひ猶ありがたくやありけむ。その  
あとにしもたづさはりて、三人のをのこ子ども百千の歌  
のふる反古どもをいかなる縁かありけむ。預りもたるこ  
とあれど、道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をとへ。と  
て、深き契をむすびおかれし細川の流もゆゑなくせきと  
められしかば、跡とふ法のともし火も、道を守り、家を

助けむ親子の命も、もろともに消えをあらそふ年月を経  
て、あやふく心細きものから、何としてつれなく今日ま  
ではながらふらむ。惜しからぬ身一つは、やすくおもひ  
捨つれども、子を思ふ心のやみはなほ忍びがたく、道を  
顧みる恨はやらむかたなく、さてもなほあづまの龜の鑑  
にうつさば、曇らぬ影もや現ると、せめて思ひあまり  
て、よろづのはばかりを忘れ、身をえうなき物になしは  
てて、ゆくりもなくいさよふ月に誘はれ出でなんとぞ思  
ひなりぬる。さりとて、文屋の康秀が誘ふにもあらず、  
住むべき國求むるにもあらず。頃はみ冬たつはじめの定  
めなき空なれば、降りみ降らずみ、時雨もたえず、嵐に  
きほふ木の葉さへ涙とともに亂れ散りつつ、事にふれて

京や住みうかり  
 けむ東の方へ  
 行きて、友とみか  
 求むとて、人し  
 一人二三人  
 行きてけり。  
 三、古今集離  
 別、源實人、や  
 りの道ならなく  
 しと、いひていき  
 歸りなむ。  
 四、爲相。  
 五、五位爲守。

心細く悲しけれど、<sup>(三)</sup>人やりならぬ道なれば、いきうしと  
 てもとどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。目  
 かれせざりつる程だに、荒れまさりつる庭も籬もまして  
 と見まはされて、慕はしげなる人々の袖の雫も慰めかね  
 たる中にも、<sup>(四)</sup>侍従、<sup>(五)</sup>大夫などのあながちに打ちくつした  
 るさまいと心苦しければ、さま／＼いひこしらへ、閨の  
 うちを見れば、昔の枕さへさながらかはらぬを見るにも、  
 今更悲しくて、傍に書きつく。  
 とどめおくふるき枕の塵をだにわれ立ちさ  
 らば誰かはらはむ  
 代々に書きおかれける歌の草子どもの奥書して、あだな  
 らぬかぎりをえりしたためて、侍従の方へおくとて、

一六 邪道の歌風  
 に染むな。意。  
 千鳥は爲相をた  
 とふ。

一七 「見よ」と  
 「三代(俊成、定  
 家)爲家とをか  
 けていふ。

書きそへたる歌、  
 和歌の浦にかきとどめたる藻鹽草これを昔  
 のかたみとも見よ  
 あなかしこよ<sup>(六)</sup>波かくな濱千鳥ひとかたな  
 らぬあとを思はば  
 これを見て、侍従のかへりごといととくあり。  
 つひによもあだにはならじ藻鹽草かたみを  
<sup>(七)</sup>みよの跡に残せば  
 迷はましをしへざりせば濱千鳥ひとかたな  
 らぬ跡をそれとも  
 このかへりごといとおとなしければ、心やすくあはれな  
 るにも、昔の人に聞かせ奉りたくて、また打ちしほたれ

ぬ。大夫の傍去らず馴れ來つるを、ふり捨てられなむな  
ごりあながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はるくくとゆくさき遠く慕はれていかにそ

なたの空をながめむ

と書きつけたる、ものより殊にあはれにて、おなじ紙に  
書きそへつ。

つくぐと空な眺めそこひしくば道とほく

ともはや歸りこむ

とぞ慰むる。

一八 比叡山延暦寺。

一九 爲相の同母兄。

山(一八)より侍従の兄(一九)の律師もいでたち見むとておはしたり。

それもいと心細しと思ひたるを、この手習どもを見て、

又書きそへたり。

二〇 満足するの意にかけたり。

二一 不祥の言を忌み避くること。

二二 僧官、此處にては慶融のことといふ。

あだにのみ涙はかけじたびごろも心(二〇)のゆき

てたちかへるほど

とは、言忌(二一)しながら涙のこぼるるを、あららかにものい

ひまぎらはすもさまぐあはれなるを、阿闍梨(二二)の君は山

伏にて、この人々よりは兄なり。このたびの道のしるべ

に送り奉らむとて、出で立たるめるを、この手習にまた

まじらはざらむやはとて書きつく。

たちそふぞうれしかりける旅衣かたみに頼

む親のまもりは

女の子はあまたもなし。唯一人にてこの近きほどの女(二三)

院にさぶらひ給ふ。院の姫宮一所生れ給ふばかりにて、

心づかひもまことしきさまにて、おとなしくおはすれば

二三 紀内侍といふ。  
二四 龜山天皇の女御新陽明門院、藤原位子。

宮の御方のこひしさもかねて申しおくついでに、侍従、  
大夫などのことはぐくみおほすべきよしもこまかに書き  
つけて、奥に、

君をこそ朝日とたのめふる里に残る撫子霜  
にからすな

と聞えたれば、御返りもこまやかに、いとあはれに書き  
て、歌の返しには、

思ひおく心とどめばふるさとの霜にも枯れ  
じ大和撫子

とぞある。<sup>(三五)</sup>五つの子どもの歌残りなく書きつゞけぬるも  
かつはいとをこがましけれど、親の心にはあはれに覺ゆ  
るまゝに書き集めたり。さのみ心弱くてはいかゞとて、

二五 爲相、爲守  
源承、慶融、紀内  
侍。

つれなくふり捨てつ。

粟田口といふ所より車は返しつ。程なく逢坂の關越ゆ  
るほどに、

定めなきいのちは知らぬ旅なれどまたあふ  
坂とたのめてぞゆく

野路といふ所は來し方行くさき人も見えず。日は暮れか  
ゝりて、いと物悲しと思ふに、時雨さへうちそゞぐ。

うちしぐれふるさと思ふ袖ぬれてゆくさき  
とほき野路の篠原

今宵は、鏡といふ所に著くべしと定めつれど、暮れはて  
て行きつかず、守山といふ所にとどまりぬ。ここにも時  
雨なほ慕ひ來にけり。

二六 山城國愛宕  
郡にあり。京に  
出入りの口に當  
る

二七 近江國滋賀  
郡にあり。京よ  
り關東への東路  
の山越に當る

二八 近江國栗太  
郡にあり。

二九 篠原は野路  
の附近の別地名  
なるが歌調上連  
續させたり。

三〇 近江國蒲生  
郡。

三一 近江國野洲  
郡。

いとどなほ袖ぬらせとや宿りけむまなく時  
雨のもる山にしも

けふは十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。未だ  
月の光はかすかに残りたるあけぼのに守山を出でてゆく。  
野洲川わたるほど、さきだちてゆく旅人の駒の足の音は  
かりさやかにて、霧いと深し。

旅人はみなもろともに朝立ちて駒うちわた

す野洲の川霧

十七日の夜は小野の宿といふ所にとどまる。月出でて、  
山の峯に立ちつづきたる松の木の間けぢめ見えて、いと  
あもしろし。ここは夜ぶかき霧のまよひにたどり出でつ。  
醒が井といふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、か

三二 近江國野洲郡。

三三 近江國坂田郡。

三四 近江國坂田郡にある有名の泉の名。

ち人はなほ立ち寄りて汲むめり。  
むすぶ手に濁る心をすすぎなばうき世の夢  
や醒が井の水  
とぞ覺ゆる。

十八日、美濃の國關の藤川わたるほどにまづ思ひつづ  
ける。

わが子ども君に仕へむためならでわたらま

しやは關の藤川

不破の關屋の板庇は今もかはらざりけり。

ひま多き不破の關屋はこのほどの時雨も月  
もいかにもるらむ

關よりかきくらしつる雨、時雨に過ぎて降りくらせば、

三五 美濃國不破郡松尾村にちる川。  
三六 古今集大歌所御歌、美濃の國關の藤川たえずして君に仕へむ萬代までも。三七 美濃國不破郡。  
三八 新古今集、雜處原良經、人住まぬ不破の關屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風

道もいとあしくて、心より外(三九がま)に笠縫(なせ)の驛といふ所に暮れはてねどとゞまる。

旅人は蓑うちらはらふゆふぐれの雨に宿かる  
笠縫の里

十九日、又こゝを出でて行く。夜もすがら降りける雨に、平野とかやいふほど、道いとわろくて、人通ふべくもあらねば、水田の面をぞさながら渡り行く。明くるまゝに雨は降らずなりぬ。晝つ方過ぎゆく道に、目にたつ社あり。人に問へば、むすぶの神とぞ聞ゆるといへば、

守れたゞちぎりむすぶの神ならばとけぬ恨にわれ迷はさで  
洲(すのまた)俣とかやいふ川には舟を竝べて、まさきの綱にやあらむ、懸けとゞめたる浮橋あり。いと危けれど渡る。この川、堤の方はいと深く、片方は浅ければ、かたふちの深き心はありながら人目づつみにさぞせかるらむ  
假の世のゆききと見るもはかなしや身をうき舟をうき橋にして

とぞ思ひつづけける。又一の宮といふ社を過ぐとて、

一の宮名さへなつかし二つなく三つなき法を守るなるべし

### 二 東 路

二十日、尾張の國下戸(二)といふ驛に行く。よきぬ道なれば、

熱田(三)の宮へまゐりて、硯とり出でて書きつけて奉る歌、  
祈るぞよわが思ふことなるみ漏かたひく潮  
も神のまに／＼

鳴海瀉和歌の浦風へだてずばおなじこゝろ  
に神もうくらむ  
満つ汐のさしてぞきつる鳴海瀉神やあはれ  
とみるめたづねて

雨風も神のこゝろにまかすらむわが行くさ  
きのさはりあらずな

鳴海の瀉を過ぐるに、潮干のほどなれば、さはりなく干  
瀉を行く。をりしも濱千鳥いと多くさきだちてゆくも、  
しるべ顔なる心地して、

濱千鳥鳴きてぞさそふ世の中に跡とめむと  
は思はざりしを

隅田川のわたりにこそありと聞きしかど、都鳥といふ鳥  
の、はじ嘴と脚と赤きはこの浦にもありけり。

(四) こととはむ嘴と脚とはあかざりしわが住む  
かたの都鳥かと

(五) 二村山を越えて行くに、山も野もいと遠くて、日も暮れ

四 伊勢物語に  
一名にし負はば  
いざこととはむ  
都鳥が思ふ人  
はありやなしや  
と一とあるを引  
きたるなり。

五 三河國愛知郡。

はてぬ。

はるくくと二村山をゆきすぎてなほ末たど  
る野邊の夕やみ

(六) 八橋にとどまらむといふ。暗きに橋も見えずなりぬ。

さゝがにのくもであやふき八橋を夕ぐれか  
けて渡りぬるかな

二十一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。

山遠き原野をわけ行く。晝つ方になりて、紅葉いと多き  
山に向ひて行く。風につれなきところどころ朽葉に染め  
かへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、青地の錦を見  
る心地す。人に問へば、(七) 宮地山といふ。

しぐれけりそむる千入のはてはまた紅葉の

六 二河國碧海郡。

七 三河國寶飯郡。



八 「思ふこと侍  
るころ、父平度  
繁朝臣遠江の國  
にまかれりける  
に、心ならず伴  
ひて、鳴海の浦  
を過ぐとてよみ  
侍りける。」さて  
も我いかになる  
みの浦なれば思  
ふ方には遠ざか  
るらむ」と著者  
の歌續古今集、  
羈旅の部にあ  
り。

九 三河國寶飯  
郡。

にしき色かへるまで  
この山までは昔見し心地するに、頃さへかはらねば、  
待ちけりな昔も越えし宮地山おなじ時雨の  
めぐりあふ世を  
山の裾野に、竹のある所に萱屋の一つ見ゆる、いかにし  
て何のたよりにかくて住むらむと見ゆ。  
主やたれ山の裾野にやどしめてあたりさび  
しき竹の一むら  
日は入りはてて、なほ物のあやめもわかぬほどに、(九)わたつ渡津  
とかやいふ所にとどまりぬ。  
二十二日の曉、夜ぶかく有明の影に出でて行く。いつ  
よりも物悲し。

一〇 三河國温美  
郡。

すみわびて月の都を出でしかどうき身はな  
れぬ有明の影  
とぞ思ひつづくる。供なる人、「有明の月さへ笠きたり。」  
といふを聞きて、  
旅人のおなじ道にやいでつらむ笠うちきた  
る有明の月  
(一〇)高師の山も越えつ。海見ゆるほどいとおもしろし。浦風  
荒れて、松の響すぐく浪いと高し。  
わがためや浪もたかしの濱ならむ袖の湊の  
波はやすまで  
いと白き洲崎に、黒き鳥のむれぬたるは鶺鴒といふ鳥なり  
けり。

一一 遠江國濱名郡濱名湖に架したる橋。

一二 遠江國濱名郡。

白濱に墨のいろなる鳥つ鳥筆もあよばば繪にかきてまし

濱名の橋より見わたせば、鷗といふ鳥いと多く飛びちがひて、水の底へも入る。岩の上にもゐたり。

かもめゐる洲崎の岩もよそならず浪のかけこす袖にみなれて

今宵は引馬の宿といふ所にとどまる。この所の大方の名をば濱松とぞいひし。親しといひしばかりの人々なども住む所なり。住みこし人の面影もさまぐ思ひ出でられて、又めぐりあひて、見つる命のほどもかへすぐあはれなり。

濱松のかはらぬ影をたづねきて見し人なみ

一三 遠江國磐田郡にある天龍川の渡なり。  
一四 西行が同船の武士に頼たれたる話、西行物語に見ゆるをいふ。

一五 遠江國磐田郡。

一六 遠江國小笠郡。

に昔をぞ問ふ

その世に見し人の子うまごなど呼び出でて、あひしらふ。二十三日、天龍の渡といふ舟に乗るに、西行が昔も思ひ出でられていと心細し。組み合せたる舟ただ一つにて、多くの人のゆききに、さしかへるひまもなし。

水の泡のうき世に渡るほどを見よ早瀬の小舟棹もやすめず

今宵は、遠つあふみ見附の國府といふ所にとどまる。里あれて物おそろし。傍に水の井あり。

誰か來てみつけの里と聞くからにいとど旅寐の空おそろしき  
二十四日、晝になりて、さやの中山越ゆ。ことのまま

一七 「任事」と書  
き、遠江國小笠  
郡に在りて、大  
己貴命を祀る。

一八 遠江國榛原  
郡。

とかやいふ社のほど紅葉いとさかりに面白し。山陰にて  
嵐も及ばぬなめり。深く入るまゝに、をちこちの峯つづ  
きこと山に似ず心細くあはれなり。麓の里に菊川といふ  
所にとどまる。

越えくらす麓の里のゆふやみに松風おくる  
さやの中山

曉起きて見れば、月も出でにけり。

雲かかるさやの中山越えぬとはみやこに告  
げよ有明の月

河音いとすごし。

わたらむと思ひやかけし東路にありとばか  
りはさく川の水

一九 遠江と駿河  
との境を流るる  
川、渡しは静岡  
縣志太郡にあ  
り。

二〇 駿河國安倍  
郡。

二一 伊勢物語に  
「駿河なる宇津  
の山邊のうつつ  
にも夢にも人に  
あはぬなりけ  
り」とあり。

二十五日、菊川を出でて、けふは大井川といふ川を渡  
る。水いとあせて、聞きにしは違ひて煩なし。河原幾里と  
かや、いと遙かなり。水の出でたらむ面影おし量らる。

思ひ出づる都のことはおほる川いく瀬の石  
の數もおよばじ

宇津の山こゆる程にしも、阿闍梨の見知りたる山伏行き  
あひたり。「夢にも人を」など昔をわざとまねびたらむ心地  
して、いとめづらかに、をかしくもあはれにもやさしく  
もおぼゆ。いそぐ道なりといへば、文もあまたはえ書か  
ず。たゞやむごとなき所一つにぞおとづれ聞ゆる。

わが心うつつともなし宇津の山夢にもとほ  
き昔戀ふとて

二 伊勢物語に「宇津の山に至りて、我が入らむとする道は、いと暗う細きに、蕨かづらは茂りて物心細く」とあり。

二三 駿河國安倍郡。

二四 駿河國安倍郡。

二五 駿河國庵原郡にあり。今興津と書く。

二六 新古今集器旅、藤原定家

「こととへよ思ひおきつゝの濱干鳥なくなく出でし跡の月影」

蕨かへでしぐれぬひまも宇津の山涙に袖の色ぞこがるる

今宵は手越といふ所にとどまる。なにがしの僧正とかやの上り給ふとて、いと人しげし。宿借りかねたりつれど、さすがに人のなき宿もありけり。

二十六日、薬科川とかやわたりて、息津の濱にうち出づ。「なくなく出でしあとの月影」など、まづ思ひ出でらる。晝立ち入りたる所に、あやしき黄楊の小枕あり。いと苦しければうち臥したるに、硯も見ゆれば、枕の障子に臥しながら書きつけつ。

なほざりにみるめばかりをかり枕結びおきつと人に語るな

二七 駿河國庵原。

暮れかかるほど清見が關をすぐ。岩こす波の白き衣をうち著するやうに見ゆるいとをかし。

清見瀉としふる岩にこととはむ浪のぬれ衣  
いくかさねきつ

程なく暮れて、そのわたりの浦近き里にとどまりぬ。浦人のしわざにや、隣よりくゆりかかる煙、いとむづかしきにほひなれば、「夜の宿醒し。」といひける人のことばも思ひ出でらる。夜もすがら風いと荒れて、浪ただ枕の上になちさわぐ。

なからはずよそに聞きこし清見瀉荒磯浪の  
かかるねざめは

富士の山を見れば、煙も立たず。昔父の朝臣にさそはれ

二八 白氏文集卷三、縛戎人に「朝喰飢渴費三杯盤、夜宿脚膝汚牀席」



一 箱の枕詞

二 相模國足柄上郡（三）にあり。之を越えて關八州に入る。

三 相模國足柄上郡。  
四 相模國足柄上郡。

まだ夜深かりければ、

（二） 玉櫛筒箱根の山をいそげどもなほあけがたき横雲の空

（三） 足柄山は道遠しとて、箱根路にかかるなりけり。

ゆかしさよそなたの雲をそばだててよそに

なしぬる足柄の山

いとさかしき山を下る。人の足もとどまりがたし。（三）湯坂

とぞいふなる。辛うじて越えはてたれば、又麓（四）に早川と

いふ川あり。まことに早し。木の多く流るるをいかにと

問へば、海人の藻鹽木を浦へ出さむとて流すなりといふ。

東路の湯坂をこえて見わたせばしほ木なが

るる早川の水

五 相模國足柄上郡。今「酒匂川」といふ。  
六 相模國足柄上郡。酒匂川岸にあり。

湯坂より浦に出でて、日暮れかゝるに、猶とまるべき所遠し。伊豆の大島まで見渡さるる海づらをいづことかいふと問へど、知りたる人もなし。海人の家のみぞある。

海人のすむその里の名もしら波のよする渚（六）に宿やからまし

（五） 鞠子川といふ川をいと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂といふ所にとどまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり。

二十九日、酒匂を出でて、濱路をはるく（六）と行く。明けはなるる海づらをいと細き月出でたり。

浦路ゆくころぼそさを浪間よりいでて知らする有明の月  
渚に寄せかへる浪の上に霧たちて、あまたありつる釣舟

見えずなりぬ。

あま小舟こぎゆく方を見せじとや浪にたち  
そふ浦の朝霧

都遠く隔りはてぬるも、なほ夢の心地して

立ち離れよもうき波はかけもせじむかしの  
人のおなじ世ならば

あづまにて住む所は月影の谷とぞいふなる。浦近き山  
もとにて風いとあらし。山寺の傍なれば、のどかにすこ  
くて、浪の音、松の風たえず。都の音づれいつしかに覺  
東なきほどにしも、宇津の山にて行きあひたりし山伏の  
たよりに、言づけ申したりし人の御許より、たしかなる  
たよりにつけて、ありし御返しとおぼしくて、

七 鎌倉極樂寺の  
境内。阿佛屋敷  
と稱して今猶存  
す。  
八 極樂寺。

旅衣なみだをそへて宇津の山しぐれぬひま  
もさぞしぐるらむ

ゆくりなくあくがれ出でしいざよひの月や  
おくれぬかたみなるべき

都を出でしことは、神無月十六日なりしかば、いざよふ  
月をおぼしめし忘れざりけるにやと、いとやさしくあは  
れにて、ただこの返りごとばかりをぞまた聞ゆる。

めぐりあふ末をぞ頼むゆくりなく空にうか  
れしいざよひの月

前の右兵衛の督の御女、歌よむ人にて、勅撰にもたび  
たび入り給へり。大宮の院の權中納言と聞ゆる人、歌の  
ことゆゑ朝夕申し馴れしかばにや、道のほどの覺東なさ

八 爲家の二男、  
爲教の女、爲  
子。  
九 後嵯峨天皇の  
皇后藤原姑子  
を大宮の院とい  
ひ、それに仕ふ  
る爲子の名を權  
中納言といふ。

など、音づれ給へる文に、  
はるぐとおもひこそやれ旅衣涙しぐるる  
ほどやいかにと  
返りごとに、

思ひやれ露も時雨もひとつにて山路わけこ  
し袖のしづくを

このせうとの爲兼の君も、おなじさまに覺束なさなど書  
きて

ふるさとは時雨にたちし旅ごろも雪にやい  
とどさえまさるらむ

返し、

たびごろも浦風さえてかみな月しぐる、空

一〇 爲教の長男  
にて爲子の兄。

に雪ぞ降りそふ

式乾門院の御櫛笥殿と聞ゆるは、久我の太政大臣の御女、これも續後撰より  
うちつづき、二たび三たびの家々の打聞にも、歌あまた入りたまへる人なれば、  
御名もかくれなくこそ。今は安嘉門院に、御方とてさぶらひ給ふ。東路思ひ立  
ちし明日とて、まかりまうしのよしに、北白川殿へまわりしかど、見えさせ給  
はざりしかば、今宵ばかりのいでたち物さわがしくて、かくとだに聞えあへず、  
急ぎ出でしにも心にかかりて、音づれきこゆ。草の枕ながら、年さへ暮れぬる  
心細さ、雪のひまなさなど書きあつめて、

消えかへり眺むる空もかきくれてほどは雲居ぞ雪になりゆく  
など聞えたりしを、立ちかへりその御返りごと、たよりあらばと心がけまゐら  
せつるを、今日は師走の二十二、文待ちえて、珍しくうれしさ、まづ何事もこ  
まかに申したく候ふに、今宵は、御方違の行幸の御上とて、まぎるゝほどにて、  
思ふばかりもいかゞと本意なうこそ、御旅明日とて御まゐりありける日しも、  
峯殿の紅葉見にとて、若き人々さそひにしほどに、後にこそかゝる事ども聞え



候ひしか。などやかくとも御たづね候はざりし。

ひとかたに袖やぬれまし旅衣たつ日を聞かぬうらみなりせば  
さてもそれより、「雪になりゆく」と、推量りの御返りごとは、

かきくらし雪ふる空のながめにもほどは雲居のあはれをぞ知る

とあれば、この度は、又「立つ日を知らぬ。」とある御返しばかりをぞ聞ゆる。

こゝろからなにうらむらむ旅衣たつ日をだにも知らず顔にて

曉便りありと聞きて、夜もすがら起き居て、都の文ども書く中に、殊にへだてなくあはれに頼みかはしたる姉君に、をさなき人々のこと、さまざまに書きやるほど、例の浪風はげしく聞ゆれば、ただ今あるまゝの事をぞ書きつけける。

夜もすがら涙もふみもかきあへず磯こす風にひとり起きゐて

又おなじさまにて、故郷にはこひしのおおとうとの尼上にも文奉るとて、磯物などのほしくもいさゝか包みあつめて

いたづらに海藻刈り鹽やくすさびにもこひしや馴れし里のあま

程經て、このおとどひ二人の返りごといとあはれにて、見れば、姉君、

玉づさを見るに涙のかゝるかな磯こす風は聞くこゝちして

この姉君は、中院なかつんの中將と聞えし人の上なり。今は三位入道とか。同じ世ながら遠ざかりはてて、行ひゐたる人なり。そのおとうとの君も、「海藻刈り鹽やく」とある返りごと、さまざまに書きつけて、「人こふる涙の海は都にも枕の下にたたへて」など、やさしく書きて、

もろともに海藻刈り鹽やく浦ならばなか／＼袖に浪はかけじを

この人も安嘉門院にさぶらひしなり。つつましくする事どもを思ひつらねて書きたるも、いとあはれにもをかし。

#### 四 枕の浪

程なく年暮れて 春はるにもなりにけり。霞こめたる眺めのたど／＼しさ。谷の戸は隣なれども、鶯の初音だにも音づれこず。思ひなれにし春の空はしのびがたく、昔の

二 前田「ゆくりなく」の歌。

こひしきほどにしも、又都のたよりありと告げたる人あれば、例の所々への文かく中に、「いざよふ月」と音づれ給へりし人の御許へ、

おぼろなる月は都の空ながらまだ聞かさり

し浪のよるく

など、そこはかとなき事どもを書き聞えたりしを、たしかなる所より傳りて、御返りごとを、いたう程も經ず待ち見奉る。

寐られじな都の月を身にそへて馴れぬ枕の浪の

よるく

權中納言の君は、まぎるゝことなく歌をよみ給ふ人なれば、このほど手習にしたる歌ども書きあつめて奉る。「海

三 紀伊國海草郡「名草」に「慰む」を掛く。

近き所なれば、貝など拾ふをりも、名草の濱ならねば、猶なきこちして、「など書きて、

いかにしてしばし都を忘れ貝浪のひまなくわれぞ碎くる

知らざりし浦山風も梅が香はみやこに似たる春のあけぼの

花ぐもりながめてわたる浦風にかすみただよふ

春の夜の月

あづま路の磯山松のたえまより浪さへ花のおも

かけにたつ

都人おもひもいでばあづま路の花やいかにと音づれてまし

四 一本「磯山風」とあり。

など、ただ筆にまかせて思ふまゝに、急ぎたる使とて、書きさすやうなりしを、また程經ず返りごとし給へり。「日頃のおぼつかさも、この文に霞晴れぬる心地して」などあり。

頼むぞよ潮干にひろふうつせ貝かひある浪の立ちかへる世を

くらべ見よ霞のうちの春の月晴れぬ心はおなじながめを

白浪の色もひとつに散る花を思ひやるさへ面影に立つ

あづま路の櫻を見ても忘れずばみやこの花を人や問はまし

彌生の末つ方、わか／＼しきわらはやみにや、日まぜにおこること二たびになりぬ。怪しうしをれ果てたる心地しながら、三度になるべき曉より起き居て、佛の御前にて、心を一つにして法華經を讀みつ。そのしるしにや、名残もなく落ちたる折しも、都のたよりあれば、かゝる事こそなど、故郷へも告げやるついでに、例に權中納言の御許へ、「旅の空にて、危きほどの心細さも、さすが御法のしるしにや、今日まではかけとどめて、」と書きて、いたづらにあまの鹽やく煙とも誰かは見まし風に消えなば

と聞えたりしを、驚きて返りごと疾くし給へり。

消えもせじ和歌の浦路に年は經て光をそふるあ

まの藻しほ火

御經のしるし、いとたふとくて、

たのもしな身にそふ友となりにけり(五)たへなる法

の花のちぎりは

卯月の初つ方、たよりあれば、又同じ人の御許へ、こ

ぞの春夏のこひしさなど書きて、

見し世こそ變らざるらめ暮れはてて春より夏に

うつる梢も

夏ごろもはやたちかへて都人今や待つらむ山ほ

ととぎす

その返りごと又あり。

草も木もこそ見しまゝに變らねどありしにも似

六

實方近衛中將藤原  
時方藤原歌の争ひよ  
つて陸奥守に打  
りて陸奥守に打  
せらるる集夏詞書  
に任みちの書  
頃五月までけ  
開かざりければ  
都なる人にてよ  
遣しつけるとあ  
りしける。とあ  
七 附近鎌倉の妙木寺

ぬ心地のみして

さて時鳥の御たづねこそ、

人よりも心つくしてほととぎすただ一聲をけふ

ぞ聞きつる

實方(六)の中將の、五月まで時鳥聞かで、みちのくにより、

「都には聞きふるすらむ時鳥關のこなたの身こそつらけ

れ」とかや申されたる事の候ふなる、そのためしと思ひ

出でられて、この文こそ殊にやさしく」など書きておこ

せ給へり。さるほどに、卯月の末になりければ、時鳥の

初音ほのかにも思ひ絶えたり。人づてに聞けば、比企(七)の

谷といふ所に、あまた聲鳴さけるを人聞きたりなどいふ

を聞きて、

しのび音は比企の谷なる時鳥雲居に高くいつか  
なのらむ

など、獨り思へどもそのかひもなし。もとより東路はみ  
ちの奥まで、昔より時鳥稀なるならひにやありけむ。一  
すぢに又鳴かずばよし、稀にも聞く人ありけるこそ、人  
わきしけるよと、心づくしにうらめしけれ。

五夜 の 鶴

又、<sup>(二)</sup>和徳門院の新中納言と聞ゆるは、京極の中納言定  
家の御女、<sup>(三)</sup>深草の前の齋宮と聞えしに、父の中納言のま  
ゐらせ置きたるまゝにて、年経たまひにける。この女院  
は、齋宮の御子にし奉り給へりしかば、傳りてさぶらひ

一 仲恭天皇の皇女、義子内親王。  
新中納言はそれ  
に仕へし定家の  
二 女、呼名、天  
皇、後鳥羽天皇の  
皇女、燕子内親  
三 王。續後撰集、戀、  
後堀河院民部卿

典侍の歌に「濁  
江にうき身こが  
るる藻刈舟はて  
はゆききの影だ  
にも見ず。」

給ふなり。「うき身こがるる藻刈舟」などよみ給へりし民  
部卿の典侍のせうとにてぞおはする。「さる人の子にて、  
あやしき歌よみて、人には聞かれじ」と、あながちに包み  
給ひしかど、遙かなる旅の空覺東なさに、あはれなる事  
どもを書きつづけて、

いかばかり子を思ふ鶴の飛びわかれならはぬ旅  
の空になくらむ

と、文のことばにつづけて、歌のやうにもあらず書きな  
し給へるも、人よりはなほざりならず覺ゆ。御返りごと  
は、

それゆゑに飛び別れてもあしたづの子を思ふ方  
はなほぞ悲しき

と聞ゆ。そのついでに、<sup>(四)</sup>故入道大納言草の枕にもたちそひて、夢に見えさせ給ふよしなど、この人ばかりやあはれともおぼさむとて、書きつけて奉る。

都まで語るもとほしおもひねにしのぶ昔の夢のなごりを

はかなしや旅寝の夢に迷ひきて覺むれば見えぬ人の面影

など、書きて奉りしを、又あながちにたより尋ねて、返りごとし給へり。さしも忍び給へりしも折柄なりけり。

あづま路の草の枕はとほけれどかたれば近きいにしへの夢

いづくより旅寝の夢(五)に通ふらむ思ひおきつる露

五 一本「旅寝の床。」とあり。

「帝王編年記に弘安元年五月十二日巳時、日吉神輿三基入洛。依三國城寺金堂供養也。十六日、日吉神輿各歸坐。」

をたづねて

などのたまへり。夏のほどは、あやしきまでおとづれも絶えて、覺束なさも一方ならず。都の方は志賀(六)の浦浪たち、山、三井寺のさわぎなど聞ゆるも、いとど覺束なし。辛うじて八月二日ぞ使待ちえ、日頃より置きたりける人の文ども取り集めて見つる。侍従の宰相の君の許より、五十首の和歌をよみたりけるとて、清書もしあへず下されたり。歌もいとをかしくなりにけり。五十首に十八首點合ひぬるもあやしく、心の關の僻目こそあるらめ。その中に、

こころのみへだてずとも旅衣山路かさなるを  
ちの白雪

とある歌を見るに、旅の空を思ひおこせてよまれたるにこそはと、心をやりてあはれなれば、その歌の傍に、文字小さく返りごとぞ書きそへてやる。

こひしのぶ心やたぐふ朝ゆふに行きてはかへる  
をちの白雲

またおなじ旅の題にて、

かりそめの草の枕のよな／＼を思ひやるにも袖  
ぞ露けき

とある處にも、また返りごとをぞ書きそへたる。

秋深き草のまくらにわれぞなくふりすててこし

鈴蟲の音を

又この五十首の歌の奥に詞を書きそふ。大方歌のさま

など記しつけて、奥に昔（七）の人の歌、

これを見ばいかばかりかと思ひつる人に代りて

音こそ泣かるれ

と書きつく。

侍従の弟爲守の君の許よりも、三十首の歌を贈りて、「これに點合ひて、わろからむ事を細かに記したべ。」といはれたり。今年は十六ぞかし。歌の口なれば、やさしく覺ゆるも、返す／＼心の闇とかたはらいたくなむ。これも旅の歌には、こなたを思ひてよみたりけりと見ゆ。下りしほどの日記を、この人々の許へ遣したりしを、よまれたりけるなめり。

立ちわかれ富士の煙を見てもなほ心ぼそさのい

かにそひけむ  
又これも返しを書きつく。

かりそめに立ち別れても子を思ふおもひを富士  
の煙とぞ見し

また權中納言の君、こまやかに文書きて、「下り給ひし後  
は、歌よむ友もなくて、秋になりては、いとど思ひ出で  
聞ゆるままに、獨り月をのみながめあかして、」など書き  
て、

東路の空なつかしきかたみだにしのぶ涙にくも  
る月影

この御返りごと、これも故郷のこひしさなど書きて、  
通ふらしみやこの外の月見ても空なつかしきあ

なじながめは

都の歌ども、この後多く積りたり。又書きつくべし。

しき島や	やまとの國は	あめつちの	開けはじめし	昔より
岩戸をあけて	おもしろき	神樂のことば	歌ひてし	さればか
しこき	ためしとて	ひじりの御代の	道しるく	人の心を
種として	よろづのわざを	言の葉に	鬼神までも	なびくめり
八島の外の	四つの海	浪もしづかに	をさまりて	空ふく風も
やはらかに	枝もならさず	降る雨も	時定まれば	君々の
御言のまゝに	従ひて	和歌の浦路の	藻鹽草	かき集めたる
跡多く	それが中にも	名をとめて	三代まで繼ぎし	人の子の
親のとりわき	譲りてし	そのまことさへ	ありながら	思へば
賤し	信濃なる	そのははき木の	そのはらに	種を蒔きたる
とがとてや	世にも仕へよ	生ける世の	身を助けよと	契りお
く	須磨と明石の	つづきなる	細川山の	山川の
			わづかに	



命かけひとて 傳ひし水の 水上も せきとめられて 今はただ  
 陸にあがれる 魚のごと 楫緒絶えたる 舟のごと 寄る方もなく  
 わびはつる 子を思ふとて 夜の鶴 なくく都 出でしかど  
 身は數ならず 鎌倉の 世のまつりごと 繁ければ 聞え上げて  
 し 言の葉も 枝に籠りて 梅の花 四とせの春に なりにけり  
 り ゆくへも知らぬ 中空の 風にまかする 故郷は 軒端も  
 あれて さゝがにの いかさまにかは なりぬらむ 世々の跡あ  
 る 玉づさも さて朽ちはてて あし原の 道もすたれて い  
 かならむ これをおもへば わたくしの 歌のみかは 世のため  
 も つらきためしと なりぬべし 行先かけて さまぐくに  
 書き残されし 筆の跡 返すぐも いつはりと 思はましかば  
 ことわりを ただすの森の ゆふしでに やよやいささか かけ  
 て問へ みだりがはしき 末の世に 麻はあとなく なりぬとか  
 諫めおきしを 忘れずば ゆがめる事を また誰か 引きなほす  
 べき とばかりに 身を顧みず 頼むぞよ その世を聞けば

さてもさは のこる蓬と かこちてし 人の情も かゝりけり  
 おなじ播磨の 境とて ひとつ流を 汲みしかば 野中の清水  
 よどむとも もとの心に まかせつゝ とどこほりなき 水莖の  
 跡さへあらば いとどしく 鶴が岡への 朝日影 八千代の光  
 さしそへて あきらけき世の なほも榮えむ。  
 長かれとあさゆふ祈る君が代をやまと言葉にけふぞのべつる

裏書(一)

「残る蓬とかこちける。」といふ所の裏書に、皇太后宮の大夫俊成卿の御女、父の讓とて播磨國越部莊といふ所を傳へ知られけるを、地頭の妨多くて、昔武藏の前司へ、異なる訴訟にはあらで、参らせられける歌新勅撰にも入り侍るとやらむ「心のままの蓬のみして」といふ歌をかこちて申されける歌

君ひとり跡なき麻のみを知らば残る蓬が敷をことわれ  
 と詠まれければ、評定にも及ばず、二十一ヶ條の地頭の非法を皆とどめられて候ひけり。その後野中の清水を過ぐとて、

忘れぬもとの心のありがほに野中の清水かけをだに見し  
と詠まれたるも、その越部の莊へ下られける時の歌にて候ふ。新勅撰に入りて侍  
りし。

永仁六年三月一日記之

裏書(二)

この阿佛房と申す人は定家の息爲家の室なり。公達五人まし〜候ふ。播磨國  
細川の莊を爲家より譲り置かれ候ふを、爲氏他腹によりて押領候ふ訴訟の爲に、  
鎌倉へ下られ候ふ時の道の日記にて候ふ。爲氏も陳狀のために鎌倉へ下向。兩人  
共に鎌倉にて死去せられし。訴訟は爲氏の方へはつけられず候ひしとぞ。阿佛は  
安嘉門院の四條と申す人なり。爲相の母なり。

更級日記

一かどで

あづま路の道のはてよりも、なほ奥<sup>(三)</sup>つかたに生ひ出で  
たる人、いかばかりかはあやしかりけんを、いかに思ひ  
始めけることにか、世の中に物語といふものあなるを、  
いかで見ばやと思ひつゝ、徒然なるひるま、よひゐなど  
に、姉<sup>(四)</sup>、繼母<sup>(五)</sup>などやうの人々の、その物語、かの物語、光  
源氏のあるやうなど、ところ〜語るを聞くに、いとゞ  
ゆかしさまされど、我が思ふままにそらにいかにかでか覺え  
語らむ。いみじく心もとなきままに、等身<sup>(六)</sup>に薬師佛を作  
りて、手あらひなどして、ひとまにみそかに入りつつ、

一 古今六帖紀友  
道一あづま路の  
陸帯かごとばか  
がな「奥つかた」は  
著者の誤解なる  
育し。上總國に  
三 物語は小説を  
いふ。物語は小説を  
四 中宮大進從五  
位高階成行の  
女。後拾遺集に  
上總大輔の名に  
て。女首あるはこ  
の女の作なり後  
に離別せらるゝ  
こと。本書に見え  
五 人間なり。人



一 者宅在茨城郡  
 珂塚村。蓋古郡  
 爲長者。此所  
 謂長者。不知何  
 姓。長者。國人相  
 傳。天下富家。聞  
 於十餘里。其宅地  
 三匹布。云々  
 二 其の容きたるも  
 むらむらと三つに  
 一。後。二。三。と  
 包み綾を二つと  
 にいふ。綾を二つと  
 詞は書ける。とつ  
 四。郡。上。國。君。津  
 郡。海。岸。に。同。名。津  
 後。年。記。憶。の。著。者。下  
 玉。井。氏。共。に。疑。を  
 存。し。或。は。黒。沙。か。と  
 千。葉。郡。黒。沙。か。と  
 せ。ら。る。

人々歌よむを聞きて、心のうちに、

くちもせぬこの川柱のこらずば昔のあとをいか  
でしらまし

その夜は黒戸の濱といふ處にとまる。片つ方はひろ山  
 なる處の、砂子はるくくと白きに、松原しげりて、月の  
 いみじうあかきに、風の音もいみじう心ぼそし。人々を  
 かしがりて、歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見む黒戸の濱の  
 秋の夜の月

二 武藏野

そのつとめてそこを立ちて、しもつさの國と武藏との

一 「太井川」といふが上の瀬、まつざとのわた  
 りの津にとまりて、夜ひとよ船にてかつが物など渡す。  
 乳母なる人はをとこなども亡くなして、境にて子産みた  
 りしかば、離れてべちにのぼる。いと戀しければ、いか  
 まほしく思ふに、せうとなる人いだきてゐていきたり。  
 皆人はかりそめの假屋などいへど、風すくまじくひきわ  
 たしなどしたるに、これはをとこなども添はねば、いと  
 手はなちに、あらくしげにて、苦といふものを一重う  
 ち葺きたれば、月残りなくさし入りたるに、紅のきぬう  
 へに着て、うちなやみて臥したる、月影さやうの人には  
 こよなくすきて、いと白くきよげにて、めづらしと思ひ  
 てかき撫でつゝ、打泣くを、いとあはれに、見捨てがたく

五 「夫もつき添  
意。居れば」の

六 古今集雜上  
紫のひととゆ

七 江戸名所圖繪  
寺に、周光山濟柴  
寺と號して、魏々  
なりし言の古利

思へど、急ぎゐていかるる心地いとあかずわりなし。お  
もかけにおぼえて悲しければ、月の興も覺えずくんじ臥  
しぬ。  
翌朝船に車かきすゑて渡して、あなたの岸に車ひきた  
てて、送りに來つる人々これより皆かへりぬ。のぼるは  
とまりなどして、いき別るるほど、ゆくも、とまるも皆  
泣きなどす。をさな心地にもあはれに見ゆ。

今は武藏の國になりぬ。殊にをかしき處も見えず。濱  
も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生  
ふと聞く野も蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて、弓もた  
るすゑ見えぬまで高く生ひ茂りて、中を分け行くに、た  
けしばといふ寺あり。遙にははさうなどいふ處のらうの

八

明。本。家。自。筆。御。不。  
物。之。間。末。誤。甚。多。  
不。審。事。等。付。朱。多。  
と。あ。つ。て。は。ム。  
さ。う。の。四。字。の。傍。  
に。朱。點。の。あり。當。  
時。に。な。ら。む。明。り。  
か。と。の。か。は。莊。の。誤。  
り。か。の。其。の。方。明。瞭。  
な。れ。ど。今。明。瞭。  
い。の。近。く。を。さ。し。  
其。の。近。く。を。さ。し。  
して。これ。は。と。き。  
坂。に。て。も。通。ず。べ

九

あとの礎などあり。いかなる處ぞと問へば、「これはいに  
しへたけしばといふさかなり。くにの人のありけるを、  
火たきやの火たく衛士にさしたてまつりたりけるに、御  
前の庭を掃くとて、「などや苦しき目を見るらむ。我がく  
に、七つ三つ作りすゑたる酒壺に、さしわたしたるひた  
えのひさごの、南風吹けば北に靡き、北風吹けば南にな  
びき、西吹けば東に靡き、東吹けば西になびくを見て、  
かくてあるよ。」とひとりごちつぶやきけるを、その時み  
かどの御女いみじうかしづかれ給ふただひとり御簾の際  
に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覽するに、この  
男のかくひとりごつを、いとあはれに、いかなるひさご  
のいかになびくらむと、いみじうゆかしくおぼされけれ



一五 じの打消助動詞は「あ  
づけともなさせ」とおほやけ  
ごともなさせ「の二句に關  
係させは此の次の二句に關  
宮に其の國を預け奉らせ給  
ふよし云々」と合はせず。或  
は「あづけとらせ」の  
はでと讀むべきか。  
六 以下物語の文は説話  
にて史實にはあらず。  
七 自筆御物本にも疑の朱點  
あり。  
八 すみだ川。昔は、すだ川  
ともいへり。すみだ川は、す  
んだ川とす。すだ川とす。  
藤彦磨の片廂前篇に説け  
り。後にあ字の加はりたる  
ものなるべし。夫木和歌抄  
の二卷に「はるく」とす。  
の川原にあさゆればかすだ  
るほどや渡なるらむとあ  
すり。作者の記憶の誤にて  
なり。すみだ川を此處に入れたる

れば、いはむ方なくて、のぼりて、帝に「かくな  
んありつる。」と奏しければ、いふかひなし。その  
をのこを罪しても、今は此の宮をとりかへし、都  
にかへし奉るべきにもあらず。竹芝のをのこに、  
生けらむ世のかぎり、武藏の國をあづけとらせて、  
おほやけごともしなさせじ。<sup>(二五)</sup> ただ宮に其の國を預け  
奉らせ給ふよしの宣旨下りにければ、この家を内  
裏の如く造りて、往ませ奉りける家を、宮など失  
せ給ひにければ、寺になしたるを竹芝寺といふな  
り。その宮のうみ給へる子どもは、やがて武藏と  
いふ姓を得てなんありける。<sup>(二六)</sup> それより後、火たき  
屋に女はゐるなり。」と語る。

一九 「あすだ川といふ」の次  
より「すみだ川とあり」まで  
を玉井氏は括弧を加へて本  
文と引離し、あすだ川とい  
ふ(を)舟にて渡りぬれば  
とし、括弧の中を注記  
の本文中に混入したるも記  
存すべけれど、あすだ川と  
いかれたる如く解せば意明か  
となるべし。  
二〇 業平は平城天皇の皇子  
阿保親王の第五子長年中  
在原親王を得て臣列に入り右  
近衛權中將となる。在原の  
在と五男の五とに官名を加  
へて在原中將といふ。中將  
の集は在原朝臣集とい  
す。其の詞書卷二四八に載  
し。其の詞書に「むさしと  
川のつらに中書云々」とあ  
り。其の川に都鳥の居ると  
見やむ都鳥のおはるを  
あとのなしとわが思ふ人  
語にやなはし集にも伊勢  
も見えたり。伊勢も伊勢  
も見えたり。伊勢も伊勢

野山蘆荻の中をわくるより外の事なくて、武藏  
と相摸との中<sup>(二七)</sup>にゐてあすだ川といふ<sup>(二九)</sup>。在五中將の、  
「ふこと問はむ」とよみけるわたりなり。中將の  
集には、すみだ川とあり。船にて渡りぬれば、相  
摸の國になりぬ。

一 西土肥の訛れるものなる  
 書に「西富中世私稱の郡  
 號にて専ら箱根山中を指せ  
 るが如し。西土肥の義にし  
 り」と。  
 二 同上地名辭書相模中郡の  
 部には「新風土記云、唐が原  
 とは今大磯宿の海邊より高  
 麗寺村及び大住郡の海邊ま  
 でに亘り此の名あり。古は  
 廣く他郡に亘りて此の名あ  
 りしと見ゆ。名義は往古東  
 本國七州に高麗人散宿せり」と。

三 「四五日かねて行く」の意

三 足柄山

にしとみといふ處の山、繪よくかきたらむ屏風  
 を立てならべたらむやうなり。かたつ方は海、濱  
 のさまも、よせかへる浪の景色もいみじうおもし  
 ろし。もろこしが原といふ處も砂子のいみじう白  
 きを二三日ゆく。「夏はやまと撫子の濃く薄く、錦  
 をひけるやうになん咲きたる。これは秋の末なれ  
 ば見えぬ。」といふに、猶ところ／＼は打こぼれつ  
 つあはれげに咲きわたれり。「もろこしが原にやま  
 と撫子の咲きけむこそ。」など、人々をかしがる。  
 足柄山といふは、四五日かねて、恐しげにくら

四 昔の遊女は長  
 柄の傘をひら  
 歩きの客をひ  
 の傘をひら  
 誦ひたり。歌  
 誦ひたり。歌  
 仲間のものこ  
 させてそこを  
 わらせたるな  
 べし。遊女の  
 昔の遊女の  
 名なるもの  
 か。

がりわたれり。やう／＼入りたつ麓のほどだに、空のけ  
 しきはか／＼しくも見えず。えもいはず茂りわたりて、  
 いと怖ろしげなり。麓に宿りたるに、月もなく暗き夜の、  
 闇にまどふやうなるに、あそび三人いづくよりともなく  
 出で來たり。五十ばかりなる一人、二十ばかりなる、十  
 四五なるとあり。庵の前に傘(四)ささせてすゑたり。をのこ  
 ども火をともして見れば、昔(五)こはたといひけむが孫とい  
 ふ。髪いと長く額いとよくかかりて、色白くきたなげな  
 くて、「さてもありぬべき下仕などにもありぬべし。」な  
 ど、人々あはれがるに、聲すべて似るものなく、空にす  
 みのぼりてめでたく歌をうたふ。人々いみじうあはれが  
 りて、けぢかくて、人々もて興ずるに、「西國のあそびは



六 士一佐々木信綱博  
節一今様歌の如し  
なれた根と断り何  
かなる根と断り何  
か曲明かならず  
野曲明かならず  
也曲明かならず  
其曲明かならず  
俗曲明かならず  
遊曲明かならず  
も曲明かならず  
の曲明かならず  
云曲明かならず  
野曲明かならず  
此文引證は此の  
條を引記して、  
あそびの足柄へ  
も推し足柄へ  
と推し足柄へ  
疑ふべし  
縣八幡郡今静岡  
郷の足柄郡今静岡  
酒郷の足柄郡今静岡

七 疑ふべし  
縣八幡郡今静岡  
郷の足柄郡今静岡  
酒郷の足柄郡今静岡

一 せを昔横走郷と稱  
せられありき  
設けられありき  
帯火此の邊富士  
地異山脈に當り  
昔の頻りに當り  
全く不明なり

一 上總國。

二 原今静岡縣庵  
見郡興津町字清  
る寺の地にあた

えかからじ。」などいふを聞きて、難波わたりにくらぶれば、「とめでたく謠ひたり。見る目のいときたなげなきに、聲さへ似るものなくうたひて、さばかり怖ろしげなる山中にたちてゆくを、人々あかず思ひてみな泣くを、幼き心地に、まして此のやどりをたたむことさへあかずおぼゆ。

まだ曉より足柄を越ゆ。まいて山の中の怖ろしげなることいはむかたなし。雲は足の下にふまる。山のなからばかりの、木の下わづかなるに、葵のたゞ三筋ばかりあるを、「世ばなれてかかる山中にしも生ひけむよ。」と人々あはれがる。水はその山に三ところぞ流れたる。からうじて越え出でて、<sup>(七)</sup>關山にとゞまりぬ。これよりは駿河

なり。<sup>(九)</sup>よこばしりの關の傍に岩壺といふ處あり。えもいはず大きな石の四方なる中に、穴のあきたる中より出づる水の清くつめたき事限りなし。

### 四 富士の山

富士の山はこの國なり。わが生ひ出でし國にては西<sup>(二)</sup>おもてに見えし山なり。その山のさまいと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青<sup>(三)</sup>をぬりたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積りたれば、色濃き衣に、白き柏着たらむやうに見えて、山の巔<sup>(四)</sup>の少し平ぎたるより煙は立ちのぼる。夕暮は火の燃えたつも見ゆ。

<sup>(三)</sup>清見が關は片つ方は海なるに、關屋ども數多ありて、

三 打のひて富士の煙に競  
つをちの浪の高に立  
し。あふふは争あふ  
又。競ふふの意あふ  
又源氏柏木の巻  
消え立ちそのまひて  
うきことしな思ひ  
亂るにけぶの意ひ  
如く思ひにの深の  
を競ふ思ひにの煙  
りを用くふ意ひの語  
例多し。ひらべの  
前。後。の。味。本。の  
こ。れ。と。類。似。の。意  
に。解。せ。ら。れ。ど。る  
に。も。あ。ら。じ。と。記  
憶。したる。川。と。前  
の。願。望。成。就。か。す  
者。の。意。か。す

海までくぎぬきしたり。煙(三)りあふにやあらむ。清見が關  
の浪も高くなりぬべし。おもしろき事かぎりなし。田子  
の浦は浪高くて、船にて漕ぎめぐる。

大井川(四)といふ渡あり。水の世の常ならず、すりこなど  
を濃くて流したらむやうに、白き水はやく流れたり。

富士川といふは富士の山より落ちたる水なり。その國  
の人の出で、語るやう、「ひととせ頃物にまかりたりしに、  
いと暑かりしかば、この水の面(五)に休みつつ見れば、川上  
の方より黄なるもの流れきて、ものにつきてとどまりた  
るを見れば、反古なり。取りあげて見れば、黄なる紙に、  
丹(六)して濃くうるはしく書かれたり。あやしくて見れば、  
來年(五)なるべき國どもを、除目(六)のこと皆書きて、此(七)の國來

來年國司の任せ  
らるべき國々の  
こと。任官するもの  
六 録の官姓名の目  
七 國司を定めて  
八 其の名を記入し  
九 ての意。記入し  
定期の行はる  
即ち内官除目  
司召といひ、地方  
行はるるを、縣召  
の除目を、縣召  
いふ。此所通な  
れど、これをこめ  
兩者をこめ、例  
召と、その例は  
にもあり。

年あくべきにもかみなして、又そへて二人をなしたり。  
あやし、あさましと思ひて取り上げて、ほしてをさめた  
りしを、かへる年の司召(五)に、此のふみに書かれたりし一  
つたがはず、この國の守(六)とありしままなるを、三月のう  
ちに亡くなりて、又なりかはりたるも、この傍に書きつ  
けられたりし人なり。かかることなんありし。來年の司  
召などは、今年この山にそこばくの神々集りて、ない給  
ふなりけり。と見給へし。めづらかなることにはさぶらふ。  
とかたる。

五 遠江より近江へ

ぬまじりといふ處もすがくと過ぎて、いみじくわづ



一 尾張愛知郡鳴海町を流る、尾張の川口の灣をいひしが、今は陸地となる。潮の満干の差の大なるを以て名あり。  
 二 村山・八橋とせざるべからず。  
 三 今的美濃國安八郡の堺を流る、長柄川の上流の左岸、墨俣町の邊。昔は此の渡りが濃尾の國境をなしたりしなり。  
 四 關が原の中間。昔は遊女と關として名ありき。  
 五 今關が原村大字松尾の六木戸坂にありき。  
 六 不詳。  
 七 息長か。近江坂田郡息長村の長者にて父の知人なる者の姓なるべし。  
 八 不詳。

思ひわづらひぬべくをかし。

尾張の國鳴海の浦を過ぐるに、夕潮ただ満ちにみちて、今宵宿らむも中間に、潮満ち來なば、此處をも過ぎじと、ある限り走りまどひ過ぎぬ。

美濃の國なる境に、すのまたといふ渡して、のがみといふ處につきぬ。そこにあそびども出で來て、夜ひとよ歌うたふにも、足柄なりし思ひ出でられて、あはれにこひしきこと限りなし。雪降りあれまどふに、物の興もなく、不破の關、あつみの山など越えて、近江の國おきながといふ人の家に宿りて、四五日あり。みつさか山の麓によるひる時雨、霰降りみだれて、日の光もさやかなら

一九 近江國犬上郡。  
 二〇 同愛知郡今の稻村・葉見村の地。  
 二一 今の東海道線野洲驛のある野洲村と守山村とを合せたる地。  
 二二 同栗本郡の地。

一 逢坂の關なり。

ず。いみじうものむづかし。そこをたちて、犬上、神崎、野洲、くる本などいふ處々、なにとなく過ぬ。湖の面はるくとして、なでしま、竹生島などいふところの見えたる、いとおもしろし。瀬多の橋皆くづれて、渡りわづらふ。

六都がへり

粟津にとどまりて、師走の二日京に入る。暗くいき着くべくと、申の時ばかりに立ちて行けば、關近くなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふものしたる上より、丈六の佛の未だあらづくりにおはするが、顔ばかり見やられたり。「あはれ

二 女一條天皇の皇  
女修子内親王  
萬壽元年一品宮  
と入道永承四年  
といふ五十五に  
年御去の森林。  
三 深山の森林。

四 藤原倫寧の女、  
右大將道綱の母  
の妹。

に人はなれて、いづこともなくおはする佛かな。」とうち見やりて過ぎぬ。ここらの國々を過ぎぬるに、駿河の清見が關と逢坂の關とばかりはなかりけり。いと暗くなりて、<sup>(三)</sup>三條の宮の西なる處に着きぬ。

ひろく<sup>(三)</sup>とあれたる處の、過ぎ來つる山々にも劣らず、大きに怖ろしげなるみ山木どものやうにて、都のうちとも見えぬ處のさまなり。ありもつかず、いみじう物騒しけれども、いつしかと思ひし事なれば、「物語もとめて見せよ。」と、<sup>(四)</sup>母をせむれば、三條の宮に、親族なる人の、衛門の命婦とて侍ひけるたづねて、文やりたれば、めづらしがりて、よろこびて、御前のおろしたるとて、わざとめでたき草子ども硯の箱の蓋に入れておこせたり。

嬉しくいみじくて、夜晝これを見るよりうちはじめ、またくも見まほしきに、ありもつかぬ都のほとりに、誰かは物語もとめ見する人のあらむ。

繼母なりし人は宮仕へせしが下りしなれば、思ひしにあらぬ事どもなどありて、世の中うらめしげにて、外に渡るとて、五つばかりなる乳兒どもなどして、「あはれなりつる心のほどなん忘れむ世あるまじき」などいひて、梅の木の、つま近くていと大きなを、「これが花の咲かむをりは來むよ。」と言ひおきてわたりぬるを、心のうちに戀しくあはれなりと思ひつつ、忍びねをのみ泣きて、その年もかへりぬ。いつしか梅咲かなむ。來むとありしを、さやあると目をかけて待ちわたるに、花も皆咲きぬ

れど、音もせず。思ひわびて、花を折りてやる。

頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春は忘

れざりけり

といひやりたれば、あはれなる事ども書きて、

<sup>(五)</sup>なほ頼め梅の立枝は契りおかぬ思ひのほかの人

もとふなり

<sup>(六)</sup>その春、世の中いみじうさわがしうて、まつさとのわ

たりの月かけあはれに見し乳母も三月朔日になくなりぬ。

せむかたなく思ひなげくに、物語のゆかしさも覺えずな

りぬ。いみじく泣きくらしして、見いだしたれば、夕日の

いと花やかにさしたるに、櫻の花残りなく散りみだる。

散る花も又こむ春は見もやせむやがて別れし人

五 拾遺集平兼盛  
わが宿の梅の立  
思ひのほかに君  
の來ませるよ  
り得たる想なる  
べし。他人の繼  
と成る人が新母  
諷く來らむこと  
したるなり。

六 治安元年、日  
本紀略に此年二  
月二十五日の條  
に「依天下一疫  
疾、奉幣二十一  
社云々。」

ぞこひしき。

### 七 紫のゆかり

又聞けば、侍従の大納言の御女なくなり給ひぬなり。殿の中將のおほしなげ  
くなるさま、我ものの悲しき折なれば、いみじくあはれなりと聞く。のぼりつ  
きたりし時、「これ手本にせよ。」とて、此の姫君の御手をとらせたりしを、「さ  
夜ふけてねざめざりせば」など書きて、「鳥部山谷に烟のもえたたばはかなく  
見えしわれと知らなむ。」と、いひしらすをかしげに、めでたく書き給へるを見  
て、いと涙をそへまさる。

かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心ぐるし  
がりて、母物語などもとめて見せ給ふに、げにおのづか  
らなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほし

一 親は母なるべし。太秦は山城國葛野郡太秦にあり。堅徳寺に建立なり。

二 實用的の品なり。

三 定家自筆御物本には「さい」の下に「さい」ありてその傍に「中將」と書入れたり。

四 語と推定したる語、即ち伊勢物語が如し。

四 日傳はらず、不明。

くおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。誰もいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるまゝに、「この源氏の物語、一の巻よりして、皆見せ給へ。」と心のうちにいのる。親の太秦にこもり給へるにも、こと事なく此の事を申して、出でむままに、この物語見はてむと思へど見えず。いとくちをしく思ひなげかるに、をばなる人の田舎よりのぼりたるところにわたいたれば、「いとうつくしうおひなりにけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、歸るに、「何をか奉らむ。まめくしきものは、まさなかりなん。ゆかしくし給ふなるものを奉らむ」とて、源氏の五十餘巻ひつに入りながら、<sup>(三)</sup>さい中將、<sup>(四)</sup>とほぎみ、せり川、しらら、あさうづな

五 缺字と推定して「名」の字を補ふ。

六 法華經第五卷の最初なる提婆達多品は一經中最も當時重んぜらる。

どいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得て歸る心地の嬉しさぞいみじきや。はしるくわづかに見つつ、心もえず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちに打臥して、ひき出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るより外の事なければ、おのづから<sup>(五)</sup>名などはそらにおぼえうかぶを、いみじき事に思ふに、夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが來て、「法華經<sup>(六)</sup>五卷をとくならへ。」といふと見れど、人にも語らず。ならばむとも思ひかけず。物語のことをのみ心にしめて、我は此の頃わろきぞかし。さかりにならば、かたちも限りなくよく、髪もいみじう長

七 源氏物語夕顔の巻の女主人公、光源氏に愛されたる不幸に愛して、いたくさしき女性。

八 源氏物語宇治十帖の男主人公。浮舟はそれ大將に愛せられ、宇治の山莊に隠居するに、藤原の切なる戀に靡き、自ら煩悶の結果、宇治川に投じて死せむと、後、小野に籠りて、尼となりし命婦人なり。

くなりなむ。(七) 光の源氏の夕顔、(八) 宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめ。と、思ひける心まづいとはかなくあさまし。

五月朔日ごろ、つま近き花橘のいと白くちりたるをながめて、

時ならずふる雪かとぞながめまし花たちはなのかをらざりせば

足柄といひし山の麓に、暗がりわたりたりし木のやうに繁れる處なれば、十月ばかりの紅葉、四方の山邊よりもけにいみじくおもしろく、錦をひけるやうなるに、外より來たる人の、今まゐりつる道に、紅葉のいとおもしろき處のありつる。といふに、ふと

いづこにもおとらじものを我が宿の世をあきはつる景色ばかりは。

物語のことを、晝は日ぐらし思ひつづけ、夜も目のさめたるかぎりは、これをのみ心にかけてるに、夢に見ゆるやう、「この頃皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遺水をなんつくる。」といふ人あるを、「そはいかに、」と問へば、天照

一 藤原行成の女。行成の日記に、三月十九日卯刻、病者氣絶、悲嘆之甚、不知所爲。四月九日、歿。觀隆寺北地。ことあり。なほ七章和字の條を参照

御神を念じませ。」といふと見て、人にもかたらず、何とも思はでやみぬる、いといふかひなし。春ごとにこの一品の宮をながめやりつつ、

咲くとまち散りぬと歎く春はただわが宿がほに花を見るかな。

三月晦日(つごも)がたつちいみに人の許にわたりたるに、櫻さかりにおもしろく、今まで散らぬもあり。かへりて、又の日、

あかさりし宿の櫻を春くれて散りがたにしも一目見しかなといひにやる。

### 八月夜の猫

花の咲き散るをりごとに、乳母なくなりしをりぞかしとのみあはれなるに、同じをり亡くなり給ひし侍従大納言の御女の手を見つつすゝろにあはれなるに、五月ばかり夜ふくるまで物語を讀みて起きぬれば、來つらむ方



も見えぬに、猫のいと長うないたるを驚きて見れば、いみじうをかしげなる猫あり。いづくより來つる猫ぞと見るに、姉なる人、「あなかま。人にきかすな。いとをかしげなる猫なり。飼はむ。」とあるに、いみじう人なれつつ、傍にうち臥したり。尋ぬる人やあると、これを隠して飼ふに、すべてげすのあたりにも寄らず、つと前にのみありて、物もきたなげなるは外さまに顔をむけて食はず。姉おととの中につとまとはれて、をかしがりらうたがるほどに、姉のなやむことあるに、ものさわがしくて、この猫を北<sup>三</sup>おもてにのみあらせて呼ばねば、かしがましくなきののしれども、猶さるにてこそはと思ひてあるに、わづらふ姉驚きて、「いづら猫は。こちゐてこ。」とあるを、

二 家の北側の召使などの居る部屋。

三 作者を指す。

「など」と問へば、「夢に猫のかたはらに來て、「おのれは侍従の大納言殿の御女のかくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君のすずろにあはれと思ひいで給へば、ただしばしここにあるを、この頃げすの中にありて、いみじうわびしきこと。」といひて、いみじうなくさまは、あてにをかしげなる人と見えて、うち驚きたれば、この猫のこゑにてありつるが。いみじくあはれなるなり。」とかたり給ふを聞くに、いみじくあはれなり。その後はこの猫を北面にも出さず、思ひかしづく。ただひとり居たる處に、この猫がむかひ居たれば、搔い撫でつつ、「侍従大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせ奉らばや。」と言ひかくれば、顔をうちまもりつつ長う

なくも、心のなし、目のうちつけに、例の猫にはあらず。聞き知り顔にあはれなり。

### 九 火の事

世の中に長恨歌といふふみを、物語に書いてある所なんなりと聞くに、いみじうゆかしけれど、えいひよらぬに、さるべき便をたづねて、七月七日いひやる。

契りけむ昔の今日のゆかしさに天の川波うち出でつるかな

かへし、

たち出づる天の川邊のゆかしさに常はゆくしきことも忘れぬ

その十三日の夜、月いみじく隈なくあかきに、皆人も寝たる夜中ばかりに、縁に出て居て、姉なる人空をつく

一  
此の隣家に住む  
女の名にて、通  
ひし來し男のし  
か喚びかけしな  
るべし。

づくとながめて、「ただ今ゆくへなく飛びうせなば、いかが思ふべき。」と問ふに、なまおそろしと思へる氣色を見て、こと事にいひなして、笑ひなどして聞けば、傍なるところに、さきおふ車とまりて、「萩の葉 萩の葉」と呼ばすれば、答へざなり。呼びわづらひて、笛をいとをかしく吹きすまして過ぎぬなり。

笛の音のただ秋風と聞ゆるになど萩の葉のそよ

とこたへぬ

といひたれば、げにとて、

萩の葉の答ふる迄も吹きよらでただに過ぎぬる

笛の音ぞうき

かやうに明るるまでなめがあかいて、夜明けてぞ皆人ね

ぬる。

そのかへる年四月の夜中ばかりに火の事ありて、大納言殿の姫君と思ひかしづきし猫も焼けぬ。「大納言の姫君」と呼びしかば、聞き知りかほになきて歩み來などせしかば、ててなりし人も「めづらかにあはれなることなり。大納言に申さむ。」などありしほどに、いみじうあはれにくちをしくおぼゆ。

ひろくと物深きみ山のやうにはありながら、花紅葉のをりは四方の山邊も何ならぬを見ならひたるに、たとしへなくせばき處の、庭のほどもなく、木などもなきに、いと心うきに、向ひなるところに、梅、紅梅など咲きみだれて、風につけてかかへくるにつけても、住みなれし

二 火事以前の住家のことなり。  
三 火事以後遷り來し住家のことなり。

ふるさと限りなく思ひ出でらる。

にほひくる隣の風を身にしめてありし軒端の梅  
ぞこひしき

その五月の朔日に姉なる人子うみてなくなりぬ。よその事だに幼くよりいみじくあはれと思ひ渡るに、まして言はむ方なく、あはれ悲しと思ひ歎かる。母などは皆(四)なくなりたる方にあるに、かたみにとまりたる幼き人々を左右にふせたるに、あれたる板屋の隙より月の漏り來て、ちご(六)の顔にあたりたるがいとゆゆしく覺ゆれば、袖をうち蔽ひて、今一人をもかきよせて、思ふぞいみじきや。

その程過ぎて、親族なる人のもとより「むかしの人の必ずもとめておこせよとありしかば、もとめしに、その折はえ見出でずなりにしを、今しも人のおこ

四 死亡くなりし姉の部屋にある方は皆詰め居るをいふ。  
五 姉の遺兒なり。  
六 一人の方の稚兒なり。

せたるが、あはれに悲しき事。」とて、かばねたづぬる宮といふ物語をおこせたり。まことにぞあはれなるや。かへりごとに、

埋もれぬかばねを何に尋ねけむ苔の下には身こそなりけれ

乳母なりし人、「今は何につけてか、」など泣くくもとありける處に歸りわたるに、

ふるさとかくこそ人は歸りけれあはれいかなる別なりけむ

昔のかたみには、いかでとなん思ふなど書きて、硯の水のこほれば、皆とちられて、とどめつといひたるに、

かき流すあとはつららにとちてけり何を忘れぬ形見とか見む

といひやりたるかへりごとに、

慰むるかたもなきさの濱千鳥なにかうき世にあともとどめむ

この乳母墓どころ見て、泣くく歸りたりし。

のぼりけむ野邊は烟もなかりけむいづこをはかと尋ねてか見し

これを知りて、繼母なりし人、

そこはかと知りて行かねど先に立つ涙ぞ道のしるべなりける

かばねたづぬる宮おこせたりし人、

住みなれぬ野邊の笹原あとはかもなくくいかに尋ねわびけむ

これを見て、せうとはその夜おくりにいきたりしかば、

見しままにもえし烟はつきにしをいかが尋ねし野邊のささ原

雪の日を経て降る頃、吉野山に住む尼君を思ひやる。

雪降りてまれの人目も絶えぬらむ吉野の山のみねのかけみち

かへる年、正月の司召に、おやのよろこびすべき事ありしに、かひなきつと

めて、同じ心に思ふべき人のもとより、「さりともと思ひつつ、あくるを待ちつる心もとなさ」といひて、

あくる待つ鐘の聲にも夢さめて秋の百夜のこちせしかな

といひたるかへりごとに、





知りたる人の近きほどに来て、かへりぬと聞くに、  
まだひとめ知らぬ山邊の松かぜも音してかへる  
物とこそきけ

八月になりて、二十餘日の曉方の月いみじくあはれに、山の方はこぐらく、  
瀧の音も似るものなくのみながめられて、

おもひ知る人に見せばや山里の秋の夜ふかき有明の月  
京に歸りいづるに、わたりし時は水ばかり見えし田ども皆刈りはててけり。

苗代の水かけばかり見えし田の刈りはつるまで長居しにけり  
十月つごもりがたに、あからさまに来て見れば、こぐらう繁れりし木の葉ど

も残なく散りみだれて、いみじくあはれげに見えわたりて、心地よげにさら  
ぎ流れし水も、木の葉にうづもれて、あとばかり見ゆ。

水さへぞすみ絶えにける木の葉ちるあらしの山の心ほそさに  
そこなる尼に「春まで命あらば、必ず來む。花ざかりはまづ告げよ。」などい

ひて、歸りにしを、年かへりて、三月十餘日になるまで音もせねば、

契りおきし花の盛をつけぬかな春やまだ來ぬ花やにほはぬ

旅なるところに来て、月の頃、竹のもと近くて、風の音に目のみ覺めて、う  
ちとけて寝られぬころ、

竹の葉のそよぐ夜ごとに寝ざめして何ともなきに物ぞ悲しき

秋頃そこを立ちて、外へうつろひて、そのあるじに、

いづことも露のあはれはわかれじをあさぢが原の秋ぞこひしき

繼母なりし人くだりし國の名を宮にも言はるるに、こと人かよはして後も、

なほその名をいはると聞きて、おやの今はあいなきよしひにやらむとあるに、

朝倉や今は雲井に聞くものをなほ木のまろが名のりをやする

一一 あらましごと

かやうにそこはかなき事を思ひつづくるをやくにて、

一 役の意、それ  
ばかりが仕事  
やうに心ひか  
ること。

二 前出

物語をわづかにしても、はかばかしく人のやうならむとも念ぜられず。このごろの世の人は十七八よりこそ経よみ、おこなひもすれ。さること思ひかけられず。からうじて思ひよることは、いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を年にひとたびにても通はし奉りて、<sup>(三)</sup>浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花、紅葉、月、雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ。とばかり思ひつづけ、あらましごとにもおぼえけり。

おやとなりなば、<sup>(三)</sup>いみじうやむごとなく我が身もなりなむなど、ただゆくへなき事をうち思ひすぐすに、親か

三。とは「とやか  
く」のとか。「何  
とかなりなば」  
なり。

四。東國の國司な  
り。長元五年二  
月八日任常陸六  
十。女子二十五  
と定家自筆本の  
傍註にあり。  
五。父の詞なり。

六。昔下總介とな  
りて下りし時の  
ことをいふ。

七。此の語は作者  
を主語として述  
べられたれど、  
正しくは「まだ  
はさむとすら  
む」がよろし。

らうじて遙に遠き<sup>(四)</sup>あづまになりて、<sup>(五)</sup>「年頃は、いつしか思ふやうに近き處になりたらば、まづ胸あくばかりかしづきたててゐて下りて、海山の景色も見せ、それをばさるものにて、我が身よりもたかうもてなしかしづきて見むとこそ思ひつれ。我も人も宿世のつたなかりければ、ありありてかく遙なる國になりたり。幼かりし時、<sup>(六)</sup>あづまの國にゐて下りてだに、心地もいささかあしければ、これをやこの國に見すて<sup>(七)</sup>まどはむとすらむと思ふ。ひとの國のおそろしきにつけても、我が身一つならば、安らかならましを、處せうひき具して、いはまほしき事もえいはず、せまほしき事もえせずなどあるが、わびしうもあるかな。と心をくだきしに、今はまいておとなにな



八、九は何れも作者を主にしして父の述べる言葉なり。

りにたるを、ゐて下りて、我が命も知らず、京のうちに  
てさす<sup>(八)</sup>らへむは例の事、あづまの國、田舎人になりて、  
ま<sup>(九)</sup>どはむ、いみじかるべし。京とても、たのもしう迎へ  
とりてむと思ふ類、親族もなし。さりとして、わづかにな  
りたる國を辭し申すべきにもあらねば、京にとどめて、  
永き別にてやみぬべきなり。京にもさるべきさまにもて  
なしてとどめむとは思ひよることにもあらず。」と、夜晝  
なげかるるを聞くこち、花、紅葉の思も皆忘れて、悲  
しく、いみじく思ひなげかるれど、いかがはせむ。

一一一 はかなき別れ

七月十三日に下る。五日かねては見むも中々なべけれ<sup>(二)</sup>

一 何時か(いつか)のあて字なるべし。

二 父の任地に從はず家に殘るべき男。

ば、内にもいらす、まいて、その日はたちさわぎて、時  
なりぬれば、今はとて簾をひきあげて、打見あはせて、  
涙をほろほろと落して、やがて出でぬるを見おくるここ  
ち目もくれまどひて、やがてふされぬるに、<sup>(三)</sup>とまる男の  
送りして歸るに、ふところがみに、

思ふこと心にかなふ身なりせば秋のわかれをふ  
かく知らまし

とばかり書かれたるをもえ見やられず。事よろしき時こ  
そ腰をれかかりたることも思ひつづけけれ。ともかくも  
いふべき方もおぼえぬまに、

かけてこそ思はざりしか此世にてしばしも君に  
別るべしとは

とや書かれにけむ。

いとど人目も見えず、さびしく心細くうちながめつつ、いづこばかりと、あけくれ思ひやる。道のほども知りにはしかば、遙にこひしく心細き事かぎりなし。あくるより暮るるまで、東の山ぎはを眺めてすぐす。

三 前出

八月ばかりに太秦(三)にこもるに、一條より詣づる道に、男車二つばかりひきたてて、物へ行くにもろともに来べき人待つなるべし。過ぎて行くに、隨身(四)だつ者をおこせて、

花見に行くとき君を見るかな

といはせられたれば、かかるほどの事はいらへぬも便(五)なしなどあれば、

四 隨身とは上皇・攝政・關白・大將・納言・參議・中將・少將・諸衛・衛尉・同佐等に朝廷より賜はる護衛兵にして、近衛の將曹府生・番長・舍人等を勤む。

千ぐさなる心ならひに秋の野の

とばかりいはせていきすぎぬ。七日さぶらふほども、ただ東路(五)のみ思ひやられてよしなし。「こと、からうじてはなれて、たひらかにあひみせ給へ。」と申すは佛もあはれと聞き入れさせたまひけむかし。

冬になりて、日ぐらし雨ふりくらくいたる夜、雲(六)かへる風はげしう打吹きて、空はれて月いみじうあかうなりて、軒近き萩のいみじく風に吹かれて、碎けまどふが、いとあはれにて、

秋をいかに思ひ出づらむ冬深み嵐にまどふをぎの枯葉は

あづまより人きたり。「神拜(七)といふわざして國の中あり

五 作者が待心に何とぞ早く事果て、互に逢ふに相見せ給へ」と佛に祈るなり。  
六 東南より詰めたる雨雲を雨後吹き返す西北風をいふ。新後撰、雑、上に「雨はるる雲のかへし、山風にしづくながらや花の散るらむ」と玉葉雜、一に「しぐれつる雲のかへし、秋風に染めあへず散る峰のあみちば」とあり。  
七 父が國司とし、巡拜するなり。

きしに、水をかしく流れたる野のはるばるとあるに、木  
むらのある、をかしき處かな。見せて、とまづ思ひ出で  
て、「ここは何處とかいふ。」と問へば、「こしのびの森とな  
ん申す。」と答へたりしが、身によそへられていみじく悲  
しかりしかば、馬よりありてそこにふた時なん眺められ  
し、

とどめおきて我がごと物や思ひけむ見るに悲し

き子忍びの森

となんおぼえし。」とあるを、見るこゝちいへばさらなり。  
かへりごとに、

子忍びを聞くにつけてもとどめ置きしちちぶの

山のつらき東路

一三 鏡のかけ

- 一 京都より初瀬
- 二 和添郡奈良
- 三 市北今般若
- 四 坂といふ
- 五 近江國滋賀郡
- 六 石山村にある石
- 七 山逢坂の關ある
- 八 山城國愛宕郡
- 九 鞍馬山の鞍馬
- 十 寺。實龜元年鑑
- 十一 眞の高弟といふ
- 十二 眞の開基といふ
- 十三 父任あけて上
- 十四 京すること
- 十五 六 模様を織出し
- 十六 たもの。寺内
- 十七 七 法務を取り統
- 十八 ぶる長官延歴
- 十九 園寺にては主長
- 二十 園城寺にては主長

かうて、つれづれとながむるに、などか物詣もせさり  
けむ。母いみじかりしこだいの人にて、「初瀬には、あな  
おそろし。奈良坂にて人にとられなばいかげせむ。石山、  
關山こえていとおそろし。鞍馬はさる山、ゐて出でむい  
と恐ろしや。親のぼりて、ともかくも」とさしはなちた  
る人のやうに、わづらはしがりて、わづかに清水にゐて  
こもりたり。それにも、例のくせは、まことしかべいこ  
とも思ひ申されず。彼岸のほどにて、いみじうさわがし  
う恐ろしきまでおぼえて、うちまどろみいりたるに、御  
帳のかたのいぬふせぎのうちに、青き織物の衣をきて、  
錦を頭にもかづき、足にもはいたる僧の、別當とおぼし  
きがより来て、「ゆくさきのあはれならむも知らず。さも

長吏、東寺にては  
ふては別當とい

八  
又シウヤツンとも  
いふ。代僧の初  
瀬に詣でたる間  
作者は母が身心  
を齋み潔めさ  
絶せ、魚類肉類を  
へさすなり。

九 願文をいふ。

よしなし事をのみ、」とうちむづかりて、御帳のうちに入りぬ、と見ても、うちおどろきても、かくなん見えつるとも語らず、心にも思ひとどめでまかでぬ。

母一尺の鏡をいさせて、えゐて参らぬかはりにとて、僧を出だし立てて、初瀬に詣でさすめり。「三日さぶらひて、この人のあべからむさま夢に見せ給へ。」などいひて、詣でさするなめり。そのほどは精進せさす。この僧歸りて、「夢をだに見でまかでなむがほいなきこと、いかが歸りても申すべきと、いみじうぬかづきおこなひて寝たりしかば、御帳の方より、いみじうけだかう清げにおはする女の、うるはしくさうぞき給へるが、奉りし鏡をひきさげて、「この鏡には、文（ふ）やそひたりし。」と問ひ給へば、かし

こまりて、「文もさぶらはざりき。この鏡をなん奉れと侍りし。」と答へ奉れば、「あやしかりける事かな。文そふべきものを。」とて、この鏡を「こなたにうつれる影を見よ。これ見ればあはれに悲しきぞ。」とて、さめざめと泣きたまふを見れば、ふしまろび泣き嘆きたる影うつれり。「この影を見れば、いみじう悲しな。これ見よ。」とて、いま片つ方にうつれる影を見せ給へば、御簾ども青やかに、几帳おし出でたる下より、いろいろの衣（きぬ）こぼれ出で、梅櫻さきたるに、鶯木傳ひなきたるを見せて、「これを見るは嬉しいな。」とのたまふとなん見えし。」と語るなり。いかに見えけるぞとだに耳もとどめず。物はかなき心にも、常に「天照御神を念じ申せ。」といふ人あり。いづこにおは

○作者の誤解  
 草郡。伊國海  
 月。前村。大縣  
 ありて。天照神  
 社。其の神  
 職。家。官。紀。天  
 造。命。より。出。た  
 根。命。氏。なり。紀。天  
 る。紀。氏。なり。紀。天  
 と。紀。氏。なり。紀。天  
 混。同。神。職。と。社  
 一。奉。安。守。所。中。女。官。内  
 侍。此。の。名。あり。伊。勢  
 二。に。神。宮。に。あり。伊。勢  
 宮。神。宮。に。あり。伊。勢  
 造。天。照。神。の。模  
 靈。天。照。神。の。模  
 尊。天。照。神。の。模  
 三。と。い。ふ。美。稱。を  
 代。三。に。天。照。神。の  
 拜。せ。む。と。なり。

しませす神佛にかはなど、さはいへど、やうく思ひわか  
 れて人に問へば、「神におはします。伊勢におはします。  
 紀伊の國に、紀(二〇)の國造と申すはこの御神なり。さては内  
 侍所に、すべら(二一)神となんおはします」といふ。「伊勢の國  
 までは思ひかくべきにもあらざるなり。内侍所にも、い  
 かでかはまゐり拜み奉らむ。空(二三)の光を念じ申すべきにこ  
 そは。」など、浮きておぼゆ。

親族なる人、尼になりて、修學院(二四)に入りぬるに、冬ごろ、  
 涙さへふりはへつつぞ思ひやるあらし吹くらむ冬の山里  
 かへし

わけて問ふ心のほどの見ゆるかな木蔭をぐらき夏のしげりを

一 京都の西北郊  
 外。今の衣笠山の  
 地。あたり一帯の

一四 宮 づ か へ (その一)

あづまに下りし親からうじてのぼりて、西山(二五)なる處に  
 おちつきたれば、そこにみな渡りて見るに、いみじう嬉  
 しきに、月のあかき夜一夜物語などして、

かかる世もありけるものを限りとて君に別れし  
 秋はいかにぞ

といひたれば、いみじく泣きて、

思ふことかなはずなどといとひこし命のほども  
 今ぞ嬉しき

これぞ別の門出といひ知らせしほどの悲しさよりは、  
 平らかに待ちつけたる嬉しさも限りなけれど、「人の上に

二 山城國紀伊郡  
 三 同葛野郡花園  
 四 田兼好法師の壽  
 五 自筆本と定家は  
 六 いたじき(板敷)  
 七 玉井兩氏ともい  
 八 だいたしとたれ

ても見しに、老いおとろへて世に出で交らひしは、をこ  
 がましく見えしかば、我はかくて閉ぢ籠りぬべきぞ。」と  
 のみのこりなげに世を思ひいふめるに、心細さたへず。  
 東は野のはるばるとあるに、東の山ぎはは、比叡の山  
 よりして、<sup>(三)</sup> 稻荷などいふ山まであらはに見えわたり、<sup>(三)</sup> 南  
 は雙の岡の松風、いと耳近う心細くきこえて、<sup>(四)</sup> うちには  
 いただきのもとまで、田といふものの、ひた引き鳴らす  
 音など、田舎のこちして、いとをかしきに、月のあか  
 き夜などはいとおもしろきを眺めあかしくらすに、知り  
 たりし人、里遠くなりて音もせず。たよりにつけて、「何  
 事かあらむ。」とつたふる人に驚きて、  
 思ひ出でて人こそとはね山里のまがきの萩にあ

釋外に對しあ、り  
 郊の地をた、り  
 近の板敷の田  
 其の敷をいふ  
 子の近をいふ  
 のあるをいふ

五 父己の意にして  
 六 皇女朱雀天皇の  
 七 藤原里

きかぜは吹く  
 といひにやる。  
 十月になりて京にうつらふ。母尼になりて、同じ家の  
 内なれど、方ことに住みはなれてあり。父はただ我をお  
 となにしすゑて、<sup>(五)</sup> われは世にも出でまじらはず、かげに  
 かくれたらむやうにて居たるを見るも、頼もしげなく心  
 細くおぼゆるに、<sup>(六)</sup> きこしめすゆかりあるところに、「何と  
 なくつれづれに心細くてあらむよりは、」と召すを、こた  
 いの親は宮仕人はいとうきことなりと思ひて過さするを、  
 「今の世の人は、<sup>(七)</sup> さのみこそは。出でたて。さてもおの  
 づからよきためしもあり。さても試みよ。」といふ人々あ  
 りて、しぶしぶに出だしたてらる。

八 女官装紗に十月より五節まで月の衣の色を説明し、御衣八つ、菊の三つ白し、とあり、濃き淡きとを濃淡取り合せたるものなるべし。

九 濃き紅の垂を上に着たるなり。「かいねり」は練糸にて織れる絹のこと。女官装紗にかいねり、紅に染められたるもの。

「うすき紅のねり」は「うすき紅のねり」とあり。かゝるもの。

まづ一夜まゐる。菊の濃く淡き八つばかりに、濃きか  
いねりを上に着たり。さこそ物語にのみ心を入れて、そ  
れを見るより外に行き通ふ類、親族などだにことになく、  
こだいの親どものかけばかりにて、月をも花をも見るよ  
り外の事はなきならひに、立ち出づるほどの心地、あれ  
かにもあらず、現ともおぼえて、曉にはまかでぬ。

里びたるここには、なかなか定まりたらしむ里住より  
は、をかしき事をも見聞きて、心もなぐさみやせむと思  
ふ折々ありしを、いとはしたなく悲しかるべき事にこそ  
あべかめれと思へど、いかがせむ。師走になりて又まゐ  
る。局して此のたびは日ごろさぶらふ。上には時々夜々  
ものぼりて、知らぬ人の中にうち臥して、つゆまどろま

れず。恥かしう物のつつましきままに、忍びてうち泣か  
れつつ、曉には夜深くありて、日くらし、父の老い衰へ  
て、われを子としも頼もしからむかけのやうに思ひ頼み  
むかひゐたるに、こひしくおぼつかなくのみおぼゆ。母  
なくなりにしめひどもも、生れしより一つにて、よるは  
左右に臥しおきするも、あはれに思ひいでられなどして、  
心もそらにながめくらさる。たちぎき、かいまむ人のけ  
はひして、いとみじく物つつまし。

一五宮 づかへ (その二)

十日ばかりありてまかでたれば、父母、すびつに火な  
どおこして待ちゐたりけり。車よりおりたるをうち見て、

一 父の語、作者  
 に向ひていふな  
 二 訪問者の中  
 に父の側に侍し  
 て話相手となり  
 たるものを指す  
 か。

三 金堂前の堂。  
 禮拜する處な  
 り。

「おはする時こそ人目も見え、さぶらひなどもありけれ。この日頃は人聲もせず、前に人影も見えず、いと心細くわびしかりつる。かうてのみも、まろが身をばいかかせむとかする。」とうち泣くを見るもいと悲し。つとめても、「今日はかくておはすれば、内外人多く、こよなく賑ははしくもなりたるかな。」とうちいひて向ひゐたるも、いとあはれに、何のにほひのあるにかと涙ぐましう聞ゆ。ひじりなどすら、前の世のこと夢に見るは、いとかななるを、いとかう、あとはかないやうに、はかくしからぬ心地に夢に見るやう、清水の禮堂(三)にゐたれば、別當とおぼしき人出で来て、「そこは前の生(四)に、この御寺の僧にてなんありし。佛師にて、佛をいと多く造り奉りし

四 長曆三年。祐  
 子内親王の御佛  
 名會宮は玉井  
 の里邸と玉井  
 氏は解きたり。  
 五 九年十二月十  
 日、佛名經を誦  
 行はる。

功德によりて、ありしすさうまさりて、人と生れたるなり。この御堂の東におはする丈六の佛はそのつくりたりしなり。箔をおしして亡くなりしぞ。」と。「あないみじ。さは、あれに箔おし奉らむ。」といへば、「なくなりしにかば、こと人箔おし奉りて、こと人供養もしてし。」と見てのち、清水にねむごろに参りつかうまつらましかば、前の世にその御寺に佛念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし。いといふかひなく、まうでつかうまつることもなくてやみにき。  
 (四) 十二月二十五日、宮の御佛名(五)に召あれば、その夜ばかりと思ひてまゐりぬ。白き衣(六)どもに、濃きかいねりをみながら、四十餘人ばかりいでゐたり。しるべしいでし人の



し、過、現、未、三、世の諸佛の名號を唱へ、眼、鼻、舌、身、意、六根の罪を滅するなり。主として宮中及び諸國寺院にて行はる。八七六、濃紅。導師か。古今集戀五、伊勢一あひに、我が物思ふ頃のさへぬる顔なる

かげに隠れて、あるが中にうちほのめいて、曉にはまかづ。雪うちちりつつ、いみじく烈しくさえこぼる曉がたの月の、ほのかに濃きかいねりの袖にうつれるも、<sup>(A)</sup>げにぬるる顔なり。道すがら、

年はくれ夜はあけがたの月影の袖にうつれるほどぞはかなき

かう立ち出でぬとならば、さても宮仕の方にも立ち馴れ、世にまぎれたるも、ねぢけがましきおぼえもなきほどは、おのづから人のやうにもおぼしめてなさせ給ふやうもあらまし。親たちもいと心えず、ほどもなくこめすゑつ。

さりとしてその有様の、たちまちにきらきらしき勢などあんべいやうもなく、

いとよしなかりけるすすろ心にも、ことの外にたがひぬる有様なりかし。

幾ちたび水の田芹をつみしかば思ひしことのつゆもかなはぬ

とばかりひとりごたれてやみぬ。

その後は何となく紛らはしきに、物語の事もうちたえ忘られて、物まめやかなるさまに心もなりはててぞ、なぞて多くの年月をいたづらにて臥し起きしに、おこなひをも物語をもせざりけむ。このあらましごととも、思ひしことどもはこの世にあんべかりける事どもなりや。光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは。薰大將の宇治に隠しすゑ給ふべきもなき世なり。あな物ぐるほし。いかによしなかりける心なりと思ひしみはてて、まめまめしく過ぐすとならば、さてもありはてず、参りそめし處にも、かくかきこもりぬるを、まこととおぼしめしたらぬさまに人々もつげ、たえず召しなどする中にも、わざとめして、「若い人まゐらせよ。」と仰せらるれば、えさらず出だしたつるにひかされて、又時々出で立てど、過ぎにし方のやうなるあいなのだのみの心おごりをだにすべ

きやうもなくて、さすがに若い人にひかれて、折々さしいづるにも、馴れたる人は、こよなく、何事につけてもありつき顔に、我はいとわかうどにあるべきにもあらず。又おとなにせらるべきおぼえもなく、時々まらうどにさしはなたれて、すすろなるやうなれど、ひとへにそなた一つを頼むべきならねば、我よりまさる人あるも羨しくもあらず、なかなか心安くおぼえて、さんべきをりふし参りて、つれづれなるさんべき人と物語などして、めでたき事も、をかしくおもしろき折々も、我が身はかやうに立ちまじり、いたく人にも見知られむにも、はばかりあんべければ、ただ大方の事へのみ聞きつつ過すに、内の御供に参りたるをり、有明の月いとあかきに、我が念じ申す天照御神は内にぞおはしますなるかし。かかる折に参りて拜み奉らむと思ひて、四月ばかりの月のあかきに、いとしのびて参りたれば、はかせの命婦は知るたよりあれば、燈籠の火のいとほのかなるに、あさましく老い神さびて、さすがにいとよう物などいひわたるが、人ともおぼえず、神の現はれ給へるかとおぼゆ。

又の夜も、月のいとあかきに、藤壺の東の戸をおしあけて、さべき人々物語しつづ月を眺むるに、梅壺の女御ののぼらせ給ふなる音なひいみじく心にくく優なるにも、故宮のおはします世ならましかば、かやうにのぼらせ給はましなど、人々いひ出づる、げにいとあはれなりかし。

天の戸を雲井ながらもよそに見て昔のあとをこふる月かな  
冬になりて、月なく雪も降らずながら、星の光に空さすがにくまなくさえわたりたる夜のかぎり、殿の御方にさぶらふ人々と物語しあかしつつ、あくればたちわかれしつづ、まかでしを思ひ出でければ、

月もなく花も見ざりし冬の夜にしみてこひしきやなぞ  
我もさ思ふ事なるを、同じ心なるもをかしうて、

さえし夜の氷は袖にまだとけで冬の夜ながらねをこそは泣け  
御前にふしてきけば、池の鳥どもの夜もすがら、こゑを羽ぶきさわぐ音のするに目もさめて、

わがごとぞ水のうきねにあかしつつ上毛の霜を拂ひわぶなる  
と獨ごちたるを、傍にふし給へる人聞きつけて、

まして思へ水のかりねのほどだにぞ上毛の霜を拂ひわびける  
かたらふ人どち局のへだてなるやり戸をあけ合せて物語などしくらす日、又  
かたらふ人の上にもし給ふを、たびたび呼びおろすに、「一切にことあらば行か  
む。」とあるに、枯れたる薄のあるにつけて、

冬枯のしののをすすき袖たゆみまねきもよせじ風にまかせむ

### 一六 春秋のさだめ

上達部殿上人などに對面する人は定まりたるやうなれ  
ば、うひうひしき里人はありなしをだに知らるべきにも  
あらぬに、十月ついたちごろのいとくらきに、不斷經に、  
聲よき人々よむほどなりとて、そなた近き戸口に二人ば

一 筆此の項定家自  
一 日長久三年十月  
三 十の夜(作者  
が通(上)記)と  
頼通(上)記)に  
於て源資通に  
ひて、歌の贈答  
すること、及  
於て八月禁中  
於ての再會等  
をに

かり立ち出でて、聞きつつ物語して、よりふしてあるに、  
参りたる人のあるを、「逃げ入りて局なる人々呼びあげな  
どせむもみぐるし、さはれ、ただをりからこそ、かくて  
ただ」といふ。いま一人のあれば、傍にて聞きるたるに、  
おとなしく静やかなるけはひにて、ものなどいふ。くち  
をしからざなり。「いま一人は」など問ひて、世のつねの  
うちつけのけさうびてなどもいひなさず、世の中のあは  
れなる事どもなど、こまやかにいひ出でて、さすがにき  
びしう、ひきいり難いふしぶしありて、我も人も答へな  
どするを、「まだ知らぬ人のありける。」など珍らしがりて、  
とみにたつべくもあらぬほど、星の光だに見えず暗きに、  
うちしぐれつつ、木の葉にかかる音のかしきを、「中々

記したるにて、  
資通は三十八歳  
の時なり。  
二 公卿即ち攝政  
關白・左右内大  
臣・大中納言・參  
議及び三位以上  
の稱。  
三 四位五位、及び  
六位の藏人たる  
人にて殿上即ち  
清涼殿の殿上の  
許に上ることを  
許されたる者。  
四 死者の冥福を  
祈るため、七日  
二七、三七日な  
ど日を定めて法  
華・最勝王・大般  
若諸經を誦讀す  
ること。

五 琵琶の調子の  
名。残夜抄に「  
風香調はよるづ  
の調の親云々」  
とあり。枕草子  
にも「しらべは  
風香調」ともあ  
り。

六 七絃の琴に對  
し十三絃のを箏  
の琴といふ。  
七 横笛の王敵に  
通ずるを忌みて  
ふやうぢやうとい

に艶にをかしき夜かな。月の隈なくあかからむもはした  
なくまばゆかりぬべかりけり。」春秋の事などいひて、「時  
に随ひ見ることに、春霞おもしろく、空ものどかに霞  
み、月のおもていとあかうもあらず、遠う流るるやうに  
見えたるに、琵琶の風香調ゆるるかにひきならしたる、  
いとみじく聞ゆるに、又秋になりて月いみじうあかき  
に、空は霧りわたりたれど、手にとるばかりさやかに澄  
みわたりたるに、風の音、蟲の聲、とりあつめたるここ  
ちするに、<sup>(六)</sup>箏の琴かきならされたる、<sup>(七)</sup>横笛の吹きすまさ  
れたるは、なぞの春とおぼゆかし。また、さかと思へば、  
冬の夜の、空さへさえわたりいみじきに、雪の降りつも  
り光りあひたるに、筆築のわななき出でたるは、春秋も

忘れぬかし。」といひつづけて、「いづれにか御心とどまる。」  
と問ふに、秋の夜に心をよせて答へ給ふを、さのみ同じ  
さまにはいはじとて、

あさ緑花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春  
の夜の月

と答へたれば、かへすがへすうち誦じて、「さは秋の夜は  
おぼしすてつるななりな。

今宵より後の命のもしもあらばさは春の夜をか  
たみと思はむ」

といふに、秋に心よせたる人、

人はみな春に心をよせつめりわれのみや見む秋  
の夜の月



一三 此は殿舎の横手又は裏手につけた細長い廂。  
一四 當時はそよ風の如く諸書に見ゆ。

一三二  
られじと思ひしを、又の年の八月に、内へ入らせ給ふに、夜もすがら殿上にて御遊ありけるに、この人のさぶらひけるも知らず、その夜は下にあかして、細殿のやり戸をおしあけて見出したれば、曉がたの月のあるかなきかにかしきを見るに、くつこのゑ聞えて、(二四) 讀經などする人もあり。讀經の人はこのやり戸口に立とまりて、物などいふに、答へたれば、ふと思ひ出でて、「時雨の夜こそかた時忘れずこひしく侍れ。」といふに、ことながう答ふべきほどならねば、

何さまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりを

ともいひやらぬを、人々また來あへば、やがてすべり入

一五 作者の歌なり。かしまみで鳴戸とは「鷺」といふことにかけたり。

りて、その夜さりまかでにしかば、もろともなりし人たづねて、返したりしなども後にぞ聞く。「ありし時雨のやうならむに、いかで琵琶のねのおぼゆる限りひきて聞かせむとなんある。」と聞くに、ゆかしくて、我もさるべき折を待つに、更になし。春ごろのどやかなる夕つかた参りたなりと聞きて、その夜もろともなりし人とゐざり出づるに、外に人々参り、内にも例の人々あれば、出でさいて入りぬ。あの人もさや思ひけむ。しめやかなる夕ぐれをおしはかりて参りたりけるに、騒がしかりければまかづめり。

(二五) かしまみて鳴戸の浦にこがれいづる心はえきや磯のあまびと

とばかりにてやみにけり。あの人からもいとすくよかに、世のつねならぬ人にて、その人は、かの人はなども、尋ね問はで過ぎぬ。

今は、昔のよしなし心もくやしかりけり、とのみ思ひ知りはて、親のものへゐて参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなるいきほひになりて、ふたばの人をも思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山につみ餘るばかりにて、後の世までの事をも思はむと、思ひはげみて、霜月の二十餘日石山にまゐる。雪うち降りつつ、道のほどさへをかしきに、逢坂の關を見るにも、昔こえしも冬ぞかし、と思ひ出でらるるに、そのほどもいとあらう吹いたり。

逢坂の關のせき風ふくこゑはむかし聞きしにかはらざりけり

關寺のいかめしうつくられたるを見るにも、そのをり荒造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、年月の過ぎにけるもいとあはれなり。打出の濱の

ほどなど見しにも變らず。暮れかかるほどに詣で着きて、ゆやにおりて御堂にのぼるに人聲もせず、山風おそろしうおぼえて、おこなひさしてうちまどろみたる夢に、中堂より御香賜はりぬ「とくかしこへ告げよ。」といふ人あるに、うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに、よき事ならむかしと思ひて、おこなひあかす。又の日もいみじく雪降りあれて、宮にかたらひきこゆる人の具し給へると物語りして心細さを慰む。三日さぶらひてまかでぬ。

一七 初瀬詣

そのかへる年の十月二十五日、大嘗會の御禊とののしるに、初瀬の精進はじめて、その日京を出づるに、さるべき人々、「一代に一度の見物にて、ゐなかせかいの人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふりいでていかむも、いと物ぐるほしく、ながれての物語ともなり

一 永承元年御冷泉天皇即位の御禊あり。  
二 初瀬へ出發の七日ほど以前より身を潔め食物を謹むことをしりて後、二十七日京を出でたるなり。

三 自分の夫ならむ。

ぬべき事なり。」など、はらからなる人はいひ腹立てど、ちごどもの親なる人は、「いかにもく心こそあらめ。」とて、いふにしたがひて、出だし立つる心ばへもあはれなり。ともに行く人々も、いとみじく物ゆかしげなるはいとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかる折に詣でむ志をさりともおぼしなむ。必ず佛の御しるしを見む。」と思ひ立ちて、その曉に京を出づるに、二條の大路をしもわたりていくに、さきに御あかし持たせ、ともの人々淨衣姿なるを、そこら棧敷どもにうつるとて、いきちがふ馬も、車も、かち人も、「あれはなぞく」と、やすからず言ひ驚き、あさみ笑ひ、あざける者どももあり。

五 正三位權中納言右兵衛督藤原良頼。

(五) 良頼の兵衛督と申しし人の家の前を過ぐれば、それ棧

四 御禊の行事を見物する爲の棧敷なり。

敷へわたり給ふなるべし。門廣うおしあけて、人々立てるが、「あれは物まうで人なめりな。月日しもこそ世に多かれ。」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか、「一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、佛の御徳必ず見給ふべき人にこそあめれ。よしなしかし。物見で、かうこそ思ひたつべかりけれ。」とまめやかにいふ人ひとりぞある。

六 顯證なり。夜の明けてあからさまなること。

(六) 道けんそうならぬさきにと、夜ふかう出でしかば、立ちおくれたる人々も待ち、いと恐ろしう深き霧をも少しはるけむとて、法性寺の大門に立ちとまりたるに、田舎より物見にのぼる者ども、水の流るるやうにぞ見ゆるや。すべて道もさりあへず、物のこゝろ知りげもなきあやし

七 九條河原にあり、藤原時平創建の寺。



八  
「引き返さなむ  
か」などの語を  
挿みて解すべ

九  
長無期と書く。  
○源氏物語橋  
姫の下の巻に  
治の宮ありに  
は桐壺帝の八  
宮にて宇治に  
棲し大姫君中  
君、手習三の  
即ち浮舟の三  
の女あり。薰  
大人君

將がその浮舟の  
君を住ませた  
に隠し置きた  
る事白藤原頼  
通の別荘は源  
此の別荘は源  
の行宮となり  
成の宮多し朱  
道の長山莊も  
なりき。御物本  
二家卿はひるの  
三字に朱點を施  
して、不明なり。  
三、高名の意不  
明なれど、當時  
山賊出沒の山と  
して有名なりし  
が爲なるべし。  
四、宇治橋の南  
あり、三町の處  
一、おはしませよ  
五、おはしませよ  
の意。手まは  
り、武具をと  
出して警戒せよ

の童女でひきよきて行き過ぐるを、車を驚きあさみたる  
こと限なし。これらを見るに、げにいかに出で立ちし道  
なりともおぼゆれど、ひたぶるに佛を念じ奉りて、宇治  
の渡りにいきつきぬ。そこにも猶しもこなたさまに渡り  
するものども立ちこみたれば、舟のかちとりたるをのこ  
ども、舟を待つ人の數も知らぬに、心おごりしたる氣色  
にて、袖をかいまくりて、顔にあてて、棹におしかかり  
て、とみに舟もよせず、うそぶいて見まはし、いとみ  
じうすみたるさまなり。<sup>(九)</sup>むごにえ渡らで、つくづくと見  
るに、紫の物語に、宇治の宮のむすめどもの事あるを、い  
かなる處なれば、そこにしも住ませたるならむとゆかし  
く思ひし處ぞかし。げにをかしき處かなと思ひつつ、か

らうじて渡りて、<sup>(二)</sup>殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、  
浮舟の女君のかかる處にやありけむなど、まづ思ひ出で  
らる。  
夜深く出でしかば、人々困じて、<sup>(三)</sup>やひろうちといふ處  
にとどまりて、物食ひなどするほどにしも、供なる者ど  
も、<sup>(四)</sup>「高の栗駒山にはあらずや。日も暮がたになりぬ  
めり。主たち調度とりおはさうぜよや。」といふをいと物  
おそろしう聞く。  
その山越えはてて、<sup>(六)</sup>贊野の池のほとりへいきつきたる  
ほど、日は山の端にかかりにたり。「今は宿とれ。」とて、  
人々あかれて、宿もとむる所はしたにて、「いとあやしげ  
なるげすの小家なんある。」といふに、「いかがせむ。」とて



二二 意不明、或  
は慮外の意か  
玉井氏新註に  
へり

「ここはけしきあるところなめり。ゆめいぬな。<sup>(三三)</sup>れうが  
いの事あらむに、あなかしこ、おびえ騒がせ給ふな。息  
もせで臥させ給へ。」といふを聞くにも、いとみじうわ  
びしく恐ろしうて、夜をあかすほど、千年を過すここち  
す。からうじて明けたつほどに、「これは盗人の家なり、  
あるじの女けしきあることをしてなむありける。」などい  
ふ。

いみじう風の吹く日。宇治の渡りをするに、網代いと  
近うこぎよりたり。

音にのみ聞き渡りこし宇治川のあじろの浪も今  
日ぞかぞふる。

一三年、四五年へだてたる事を次第もなく書きつづければ、やがてつづきた

ちたる修行者<sup>すまやうが</sup>めきたれど、さにはあらず。年月へだたれる事なり。

春ごろ鞍馬にこもりたり。山ぎは霞みわたり、のどやかなるに、山の方よ  
り、わづかにところなど掘りもて来るもをかし。出づる道は花もみな散りはて  
にければ、何ともなきを、十月ばかりに詣づるに、道のほど山の景色、このこ  
ろは、いみじうぞまさるものなりける。

山の端、錦をひろげたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶をちらすやう  
にわきかへるなど、いづれにもすぐれたり。詣で着きて、僧坊にいきつきたる  
ほど、かきしぐれたる紅葉のたぐひなくぞ見ゆるや。

奥山の紅葉のにしきほかよりもいかにしぐれて深く染めけむ  
とぞ見やらるる。

二年ばかりありて、また石山にこもりたれば、よもすがら雨ぞいみじく降  
る。旅居は雨いとむづかしきものと聞きて、しとみをおしあけて見れば、有明  
の月の谷の底さへくもりなくすみ渡り、雨と聞えつるは、木の根より水の流る

る音なり。

谷川の流は雨ときこゆれどほかよりけなるありあけの月

また初瀬に詣づれば、はじめにこよなく物たのもし。處々にまうけなどしていきもやらず。山城の國はその森などに、紅葉いとをかしきほどなり。初瀬川渡るに、

初瀬川たちかへりつつ尋ねれば杉のしるしもこのたびや見む

と思ふもいとたのもし。

三日さぶらひて、まかでぬれば、例の奈良坂のこなたに、小家などに、このたびはいと類ひろければ、えやどるまじうて、夜中にかりそめに庵つくりてすゑたれば、人はただ野にゐて夜をあかす。草の上にむかばきなどをうち敷きて、上にむしろをしきて、いとほかなくて夜をあかす。頭もしとどに露おく。暁がたの月いといみじく澄みわたりて、よにしらすをかし。

ゆくへなき旅の空にもおくれぬは都にて見しありあけの月

何事も心にはぬ事もなきままに、かやうにたちはなれたる物語をしても、道のほどをかしとも苦しとも見るに、おのづから心もなぐさめ、さりとも頼もしう、さしあたりて嘆かしなどおぼゆる事どもないままに、ただ幼き人々を、いつしか思ふさまにしたてて見むと思ふに、年月のすぎゆくを、心もとなく、たのむ人だに、人のやうなるよろこびしてはとのみ思ひわたるここと頼もしかし。

いにしへいみじうかたらひ、夜晝歌などよみかはしし人の、ありありても、いと昔のやうにこそあらね、たえずいひわたるが、越前守のよめにて下りしが、かきたえ音もせぬに、からうじてたより尋ねて、これより、

絶えざりし思も今は絶えにけりこしのわたりの雪の深さに  
といひたるかへりごとに、

しら山の雪の下なるさされ石の中の思ひは消えむものは  
やよひのついたちごろに、西山の奥なる處にいきたる、人目も見えず、のど

のどと霞みわたりたるに、あはれに心細く、花ばかり咲きみだれたり。

里とほみあまり奥なる山路には花見にとても人來ざりけり

世の中むつかしうおぼゆるころ、太秦にこもりたるに、宮にかたらひきこゆる人の御もとより文ある、返り事きこゆるほどに、鐘のおとのきこゆれば、

しげかりし浮世のことも忘れず入あひの鐘の心ぼそさに

と書きてやりつ。

うらうらとのどかなる宮にて、同じ心なる人三人ばかり物語などしてまかでてまたの日、つれづれなるままに、こひしう思ひ出でらるれば、二人の中に、

袖ぬるる荒磯浪と知りながらともにかづきをせしぞ戀しき

ときこえたれば、

荒磯はあされど何のかひなくてうしほにぬるるあまの袖かな

いま一人

みるめおふる浦にあらずば荒磯の浪間かぞふるあまもあらしを

同じ心にかやうにいひかはし、世の中のうきも、つらきも、をかしきもかたみにいひ語らふ人、筑前に下りて後、月のいみじうあかきに、かやうなりし夜宮にまわりてあひては、つゆまどろまず眺めあかいしものを、こひしく思ひつつねいりにけり。宮に参りあひて、うつつにありしやうにてありと見て、うちおどろきたれば、夢なりけり。月も山の端近うなりにけり。さめざらましを

と、いとど眺められて、

夢さめて寢覺の床の浮くばかり戀ひきとつけよ西へゆく月

さるべきやうありて、秋ごろ和泉に下るに、淀といふよりして、道のほどのをかしうあはれなることいひつくすべうもあらず。たかはまといふ處にとどまりたる夜、いと暗きに、夜いたうふけて、舟のかちの音きこゆ。問ふなれば、あそびの來たるなりけり。人々興じて舟にさしつけさせたり。遠き火の光に、ひとへの袖長やかに扇さしかくして、歌うたひたるいとあはれに見ゆ。

またの日、山の端に日のかかるほど、住吉の浦を過ぐ。空も一つにきりわた

れる、松の梢も、海のおもても、浪のよせくる渚のほども繪にかきても及ぶべき方なうおもしろし。

いかにいひ何にたとへてかたらし秋のゆふべの住吉のうら

と見つつ、綱手ひきすぐるほど、かへりみのみせられてあかずおぼゆ。冬になりてのぼるに、大津といふ浦に舟にのりたるに、その夜、雨風岩もうごくばかり降りふぶきて、かみさへなりてとどろくに、浪のたちくる音なひ、風の吹きまどひたるさま、恐ろしげなること、命かぎりつと思ひまどはる。をかの上に舟を引き上げて夜をあかす。雨はやみたれど、風なほ吹きて舟出ださず。ゆくへもなきをかの上に五六日とすぐす。からうじて風いささかやみたるほど、舟の簾まき上げて見渡せば、夕汐ただ満ちに満ちくるさまとりもあへず、入江のたづの聲惜しまぬもをかく見ゆ。國の人々集まり来て、「その夜この浦を出でさせ給ひて、石津につかせ給へらましかば、やがて此の御船なごりなくなりなまし。」などいふ。心細うきこゆ。

荒るる海に風よりさきに船出して石津の浪と消えなましかば

一八 人 だ ま

世の中に、とにかくに心のみつくすに、宮仕とても事は一すぢに仕うまつりつかばや、いかがあらむ。時々たちいでば、何なるべくもなかめり。年はややさたすぎゆくに、若々しきやうなるもつきなうおぼえならるるうちに、身の病いと重くなりて、心に任せて物詣などせし事もえせずなりたれば、わくらばの立出でも絶えて、ながらふべき心地もせぬままに、幼き人々をいかにもく、我があらむ世に見おく事もがなと、臥し起き思ひなげき、頼む人のよろこびのほどを心もとなく待ちなげかるるに、

一 あらむの字いかゞ  
けて解すべし。  
二 「立ち出で」は  
宮仕の中途退出  
として家に歸るこ  
と。  
三 不似合に感じ  
染むやうになる  
なり。

四 突、從五位上  
橋付通。

五 希望の協いて  
 天喜五年七月廿  
 日信濃守に任ぜ  
 らるること御物  
 本の傍註にあ  
 六 父の時より屢  
 遭せし上總常  
 陸などよりは近  
 き信濃國とな  
 りたるをいふ  
 七 死は知らずとい  
 ふこと  
 八 男、橋仲俊、此  
 の年十七歳  
 九 狩衣などの下  
 に着る衣の紅な  
 るを粘などに  
 打つて光澤を出  
 したるもの  
 一〇 表薄紫、裏  
 青、六月より八  
 九月頃まで着  
 る狩衣をい  
 ふ  
 一 紫苑とは表  
 濃き薄色(赤味  
 を帯びたる薄  
 紫)裏青なる  
 狩衣にし

て、織物とは染  
 染たる糸より  
 織る時、糸に  
 緯糸の色を  
 裏糸の色を  
 表糸の色を  
 表はす  
 一 薄黒の青が  
 ムリたるもの  
 今、指貫は似  
 り、指貫は紐  
 裾をく、りし  
 たる首にてし  
 たるもの  
 一 狩衣、關腋  
 の袖に似て短  
 く、袖付けは  
 るを少し縫ひ  
 前には縫はず、  
 一 括りあり、袖  
 一 四 中門の廊な  
 一 五 國司の任期  
 は四年なれど  
 も、此の間常  
 は其の間常に  
 地にあらざる  
 理に實務を預  
 て、京に歸る  
 の多し

秋になりて待ちいでたるやうなれど、思ひしにはあらず、いとほいなくくちをし。<sup>(六)</sup>親の折より立かへりつつ見し東路よりは近きやうに聞ゆれば、いかがはせむにて、ほどもなく下るべき事どもいそぐに、かどでは女なる人のあたらしく渡りたる處に、八月十日にす。<sup>(七)</sup>後のことは知らず、そのほどの有様は、物さわがしきまで人多くいさほひたり。  
 二十七日にくだるに、男なるはそひてくだる。<sup>(九)</sup>紅のうちたるに、萩のあを、<sup>(二〇)</sup>紫苑の織物の指貫着て、太刀はきて、しりに立ちてあゆみ出づるを、それも織物のあをに<sup>(二一)</sup>びいろの指貫、<sup>(二二)</sup>狩衣きて、<sup>(二三)</sup>廊のほどにて馬に乗りぬ。のしり満ちて下りぬる後、こよなうつれぐなれど、い

といたう遠きほどならずと聞けば、さきさきのやうに心細くなどはおぼえであるに、送りの人々又の日歸りて、「いみじうきらきらしうて下りぬ。」などいひて、「この曉にいみじく大きな人だまのたちて、京さまへなん來ぬる。」と語れど、供の人などのにこそはと思ふ。ゆゆしきさまに思ひだによらむやは。今はいかで、この若き人々おとなびさせむと思ふより外の事なきに、かへる年の四月に<sup>(二五)</sup>上り來て、夏秋も過ぎぬ。  
 九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見ないて、思ふこころ、世の中に又たぐひある事ともおぼえず。初瀬に鏡たてまつりしに、ふしまるび泣きたる影の見えけむはこれにこそはありけれ。嬉しげなり

一六 康平元年。夢の如く見  
一七 ならずにて夫のほ  
かなく死したる  
一八 男、仲俊の  
こと。  
一九 父の概車な  
り。

二〇 意不明、佐  
佐木博士は誤寫  
ならむかといへ  
り。

けむ影はきし方もなかりき。今ゆくすゑはあべいやうも  
なし。二十三日、はかなく雲けぶりになす夜、去年の秋、  
いみじくしたてかしづかれて、<sup>(二八)</sup>うちそひて下りしを見や  
りしを、いと黒き衣の上に、ゆゆしげなる物を着て、<sup>(二九)</sup>車  
のともに泣く泣く歩みいでて行くを見出だして思ひいづ  
るここに、すべてたとへむ方なきままに、やがて夢路に  
まどひてぞ思ふに、その人<sup>(三〇)</sup>やみにけむかし。  
昔よりよしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜  
晝思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世を  
ば見ずもやあらまし。

初瀬にて前のたび稻荷よりたまふしるしの杉よとて投  
げ出でられしを、出でしままに稻荷に詣でたらましかば、

かからずやあらまし。

年ごろ天照御神を念じ奉れと見ゆる夢は、人の御乳母<sup>(三二)</sup>  
して内わたりにあり、みかど、きさきの御蔭にかくるべ  
きさまをのみ、<sup>(三三)</sup>夢ときもあはせしかども、その事は一つ  
かなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたが  
はぬ、あはれに心うし。かうのみ心に物のかなふ方なう  
てやみぬ<sup>(三四)</sup>人なれば、功德も作らずなどして、ただよふ。

一九 佛陀 來 迎

さすがに命はうきにもたえず、ながらふめれど、後の  
世も思ふにかなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたきに、  
頼むこと一つぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢

二一 夢を判断す  
るを職業とする  
者その判断を夢  
を合はすとい  
ふ。

二二 自分を指  
す。



一 印は梵語に  
 母陀羅と訓  
 ず。諸佛内證の  
 徳を標識する  
 に手指を種々に  
 組合せて作る  
 形。  
 二 佛陀を念ずる  
 者の臨終に當り  
 て、阿彌陀佛西  
 方極樂淨土より  
 來り迎へて、死  
 者を淨土に導く  
 といふことあり。  
 三 死後極樂往生  
 の瑞祥を夢み  
 て、死後の希望  
 を得たるなり。  
 四 「見し」の意  
 か。或は「見るべ  
 きに」の意か。

一四四  
 に、ゐたる處のやのつまの庭に、阿彌陀佛たちたまへり。  
 さだかには見え給はず、霧ひとへ隔たれるやうにすきて  
 見え給ふを、せめて絶間に見奉れば、蓮華の座の、土を  
 あがりたる高さ三四尺、佛の御たけ六尺ばかりにて、金  
 色に光り輝き給ひて、御手片つ方をば廣げたるやうに、  
 いま片つ方には印(一)を作り給ひたるを、こと人の目には見  
 つけ奉らず、われ一人見奉るに、さすがにいみじく恐  
 ろしければ、簾のもと近くよりても見え奉らねば、佛(二)さ  
 は、この度は歸りて、後に迎へ(三)に來む」とのたまふ聲我  
 が耳一つに聞えて、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚  
 きたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼としける。  
 をひどもなど、一ところにて朝夕見る(四)に、かうあはれ

五 六郎か。

七 古今和歌集、  
 雑上の讀人、  
 ずの歌に「わが  
 心なきにやね  
 つさぐしなや  
 ばすて山にて  
 月を更科日記  
 り。之れに基  
 か名は之れに

に悲しき事の後、ところぐ(一)になりなどして、誰も見ゆ  
 ることかたうあるに、いと暗き夜、六(五)らうにあたるをひ  
 の來たるに、珍らしうおぼえて、  
(七)月も出でて闇にくれたる姨捨になにとて今宵た  
 づね來つらむ  
 とぞいはれにける。  
 ねむごろに語らふ人の、かうて後おとづれぬに、  
 今は世にあらじものや思ふらむあはれ泣くく(七)猶  
 こそはふれ  
 十月ばかり、月のいみじうあかきを泣くく(七)ながめて、  
 ひまもなき涙にくもる心にもあかしと見ゆる月  
 の影かな

年月はすぎ變りゆけど、夢のやうなりしほどを思ひ出  
づれば、こころもまどひ、目もかきくらすやうなれば、  
そのほどの事はまたさだかにもおぼえず。人々は皆ほか  
に住みあかれて、ふるさとに一人、いみじう心ぼそく悲  
しくて、ながめあかしわびて、久しうおとづれぬ人に、  
繁りゆく蓬が露にそぼちつつ人にとはれぬ音を

のみぞ泣く

尼なる人なり。

世の常の宿のよもぎを思ひやれそむきはてたる  
庭の草むら

### 紫式部日記

#### 一 秋のけはひ

秋<sup>(一)</sup>のけはひのたつままに、土御門殿の有様いはむ方な  
くをかし。池のわたりの木末ども、やり水のほとりの草  
むら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空もえ  
んなるにもてはやされて、不<sup>(二)</sup>斷の御讀經の聲々あはれま  
さりけり、やうく涼しき風のけしきにも、例の絶えせ  
ぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前<sup>(四)</sup>にも、  
近<sup>(五)</sup>うさぶらふ人々はかなき物語するをきこしめしつつ、  
なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかく

一 五年七月天皇寛弘  
二 左大臣藤原道長  
三 御産あるべ  
四 中宮彰子のこ  
五 御懷妊の身

し。なやましきもありと知る

- 六 普通、佛法に歸依せん。現世のなやみある心なり。
- 七 御格子を釣り上げて明くるは格子を降して閉づることにもいふ。此所は前者なり。
- 八 ニヨウクワンと讀むべし。殿司の女官なり。
- 九 命婦は女蔵人の宮中にて事か勤む。下蔵の女房、雜
- 一 刻、初夜戌の刻、中夜子の刻、後夜寅の刻、今日の午
- 一 前四時、五つの壇の中、中央不動、東降三世、西大威徳、南軍荼利夜叉、北金剛夜叉の諸明王を請じて修法す。
- 一 修法は佛法の祈禱なり。
- 一 刻を音讀すべし。修法の時
- 一 三はじめつ。一本には一説き

させ給へり。御有様などのいとさらなる事なれど、うき世のなぐさめには、かゝる御前をこそたづね参るべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなく、よろづ忘るるにも、かつはあやしき。まだ、夜深きほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御かうしまるりなばや、女官はいまださぶらはじ。藏人まゐれ。」などいひしろふほどに、後夜のかねうちおどろかし、五壇の御修法、時はじめつ。われもくとうちあげたる伴僧の聲々、遠く近く聞きわたされたる程、おどろくしくたふとし。観音院の僧正、ひんがしの對より二十人の伴僧をひきゐて御加持まゐり給ふ足音、渡殿の

- 一 伴僧といふ。
- 一 四雲山城國愛宕郡北岩倉山大雲寺内觀音院の勝算僧正。
- 一 五なり。僧正は僧官の最上位。
- 一 六位するもの。
- 一 七念を執り、陀羅尼を唱へて觀念を凝らす新羅の方法など、
- 一 八法住の座主はこゝにて
- 一 九たり。馬見所として馬場のあ
- 一 十も確に注へたる殿舎と記せど
- 一 十一次ぎて諸僧を統ぶる僧官。
- 一 十二〇僧籍を統ぶる殿舎。
- 一 十三一〇僧籍を統ぶる殿舎。
- 一 十四りて色を異にする此の時
- 一 十五青黒のものを用ひたるが如
- 一 十六齋祇。修學院の僧都、
- 一 十七あざりは關梨。梵語によ
- 一 十八る僧官の稱。
- 一 十九五壇の西方なる明王に
- 一 二十して、本地は阿彌陀佛なり。
- 一 二一渡り廊下にして、局は

はしの、とどろとどろとふみならさるるさへぞ。ことところのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場のおとど。へんちじの僧都はふどのなどに、うちつれたる淨衣すがたにて、ゆるゆるしき唐橋どもをわたりつつ、木のまをわけてかへりいるほども、遙に見やらるるこちしてあはれなり。さいぎ阿闍梨も大威徳をうやまひて腰をかがめたり。人々参りつれば夜も明けぬ。渡殿の戸ぐちの局に見出だせば、ほのうちきりたる朝の露もまだおちぬに、殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水はらはせ給ふ。橋の南なる女郎花のいみじう盛りなるを一枝折らせ給ひて、几帳



一 上達部カンマ  
 以上位のもの  
 参議なれば四位  
 も入る。殿上人  
 テンジャウビト  
 と讀む。四位五  
 位、殿上人は六  
 位を許されたる  
 者。を許されたる  
 稱。の稱。後世の  
 二 板敷屋の四圍の  
 側。後世の縁  
 三 讀經あらそひ  
 宮人の誤寫か、當  
 じく讀經と興に  
 たることは既

更科日記にいへ  
 四 中宮に關する  
 一切の事務を總  
 管する中宮大  
 管のなり。たゞ  
 齋信にて、たゞ  
 のぶの誤。たゞ  
 六五 藤原實成。  
 音樂を遊ぶな  
 七 意。伎人の遊びの  
 門。音樂の遊び  
 は。せせせられざ  
 り。と。なり。自  
 八 里居なり。自  
 家を歸り居たる  
 人。をいふ。  
 一 丁。沈白檀  
 子。の。香料を  
 細粉にし、甲香  
 と。合せて練るこ  
 二、三 更科日記  
 人だまの條に  
 四 説。明。した。り。  
 にて。擣。ち。て。光澤

一五二  
 きのくにのしらゝの濱にひろふてふこの石こそはいはほともなれ  
 扇どものをかしきを、その頃は人人もたり。

三 と の お

八月廿日あまりの程よりは、<sup>(一)</sup>上達部、殿上人ども、さ  
 るべきは皆とのゐがちにて、橋の上、對の簀子<sup>(三)</sup>などに、  
 皆うたたねをしつつ、はかなうあそびあかす。こと、笛  
 の音などにはたとどしき若人たちのとね<sup>(三)</sup>あらそひ、今  
 様歌どもも所につけてはをかしかりけり。宮の大夫<sup>(四)</sup>なり  
 のぶ、左の宰相の中將經房、左兵衛の督、<sup>(五)</sup>みのの少將濟  
 政<sup>(六)</sup>などしてあそび給ふ夜もあり。わざとの御あそびは、<sup>(七)</sup>

殿おぼすやうやあらむ、せさせたまはず。年ごろ里居し  
 たる人々の中絶えを思ひおこしつつ、まゐりつどふけは  
 ひさわがしうて、その頃はしめやかなることなし。

四 辨 の 宰 相

廿六日、御たきものあはせはてて、人々にもくばらせ  
 給ふ。まろがしゐたる人々あまた集ひゐたり。うへより  
 あるる道に、辨の宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、  
 晝寝したるほどなりけり。萩、紫苑、いろくのきぬに、  
 こきが<sup>(四)</sup>うちめ心ことなるを上に来て、顔は引き入れて、  
 硯の宮にまくらしてふし給へるひたひつきいとらうたげ

を出したるもの。

になまめかし。繪にかきたる物の姫君の心地すれば、口おほひを引きやりて、「物語の女の心地もし給へるかな。」といふに、見あげて、「物ぐるほしの御さまや。寝たる人を心なく驚かすものか。」とて、少し起きあがり給へる顔のうち赤み給へるなど、こまかにをかしうこそ侍りしか。おほかたもよき人の、をりからに、又こよなくまさるわざなりけり。

### 五 菊の露

九日、<sup>(二)</sup>菊の綿を、兵衛のおもとのもて来て、「これ、<sup>(三)</sup>殿の上の、とりわきていとようあいのごひすて給へと、の

一 菊のきせ綿ともいふ。菊の花の上を蔽ひて、その香をうつしたる綿にて身體

たまはせつる。」とあれば、

菊のつゆわくるばかりに袖ぬれて花のあるじに

千代はゆづらむ

とてかへし奉らむとするほどに、「あなたに還りわたらせ給ひぬ。」とあれば、ようなさにとどめつ。その夜さり御前に参りたれば、月をかしきほどにて、はしに、御簾の下より裳のすそなどほころび出づるほどに、<sup>(五)</sup>小少將の君 大納言の君などさぶらひ給ふ。御火取にひと日の炷物とうでて<sup>(六)</sup>こころみさせ給ふ。御前の有様のをかしさ、蔦の色の心もとなきなど、口々きこえさするに、例よりもなやましき御けしきにおはしませば、御加持どもも参るかたなり。さわがしき心地して入りぬ。人の呼べば、

を拭へば老いの氣を去るといふ迷信行はれたる。二 道長の妻を指す。三 新勅撰集には「わかゆばかりに袖ふれて」とあり。四 中宮彰子。

五 以下女官の呼名なり。

六 合せ香の調合の如何を焼きて試みるなり。

七 中宮の御産氣の兆あるが爲なり。

一 産室の装置なり。中宮御産部類記に「今朝從内御産帳一基。白御屏風十二帖。白御几帳十六本。白御疊十五帖。と見えたり。白御疊十等公達、親王、攝家、清華御所の子息。」  
二 御所  
三 鬼氣とも書く。妖怪、變化、死靈、生靈等の人に憑く等の迷信。當時病者又は産婦等の熱に惱み、譫語呻吟する等のことあれば、直に靈の崇と信じ、修驗者を呼んで調伏せしむ。修驗者は各一人の「よりました」と稱する者を伴ひ、病者に憑きたる怨靈を呪法によつて一時

この「よりました」に驅り移さしめ、然る後に調伏し了るなり。  
五 過去、未來、現在の時間無数の位陀にいふ。  
六 陰陽道は元正天皇の時吉備眞備の支那より傳來するものといふ。天武天皇の時中務省に陰陽寮を置き、日月、星辰、風雲の變化を候ふことを掌どる。陰陽師(オシミヤウシ)は此の寮に屬し、占筮、相地、呪盟、清祓の事を行ふ道士なり。  
七 六月晦大祓の祝詞の終りに「高天原に耳振り立てよきくもの」と云々とあり。  
八 誦經の僧に贈る布施の品を運ぶ使。  
九 内裏より下り來て祇候する女房。  
一〇 加持祈禱に熱狂する高僧の形容。不動明王は五大明王の一にて、忿怒の相を現はし、外道惡魔を降伏さすもの。

局にありて、しばしとおもひしかど、寢にけり。夜中ばかりより騒ぎたちてののしる。

### 六 御祈禱

十日のまだほのくとする程に、御しつらひかはる。白き御帳にうつらせ給ふ。殿よりはじめ奉りて、きんだち、四位五位どもたちさわぎて、御帳のかたびらかけ、御ましどももてちがふ程いとさわがし。日ひと日、いと心もとなげにおきふしくらさせ給ひつ。御物怪どもかりうつし、かぎりなくさわぎののしる。月ごろ、そこらさぶらひつる、殿のうちの僧をばさらにもいはず、山々寺々

を尋ねて、驗者といふかぎりは残りなく参りつどひ、三世の佛もいかに聞き給ふらむと思ひやらる。陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百萬の神も耳振り立てぬはあらじと見えきこゆ御誦經の使立ちさわぎくらし、其の夜もあけぬ。御帳のひんがし面には、うちの女房参りつどひてさぶらふ。西には、御物怪うつりたる人々御屏風一よろひをひきつぼね、つぼね口には几帳をたてつつ、驗者あづかりくののしりゐたり。南にはやんごとなき僧正、僧都かさなりゐて、不動尊の生き給へるかたちをも呼び出であらはしつべう、たのみみ、うらみみ、聲みなかれわたりにた

一 廂との間に立てたる衾障子なり。

一 清水宣昭の釋には「中に」の誤寫ならむといへり。

一 今の一間にあらず、柱と柱との間をひとまといふ。  
二 僧正の位に脱字あるべし。  
三 法務僧都の義にて、東寺の義にて、東寺

の長者をいふ。此の法務僧都は濟信。  
五 天台座主記に源(西方院)隆興守元明男とあり。僧官補任に榮花物語に「法性寺院源僧都御願書讀み」とあり。  
六 安産祈禱の願文。  
七 「忌々しく斯く涙をこぼすぞ」といふなり。  
八 宮中に候ふ女房の呼名國名を以てしたるならむ。  
九 五位以上の婦人の稱。葛野郡花園村字室。眞言宗。光孝天皇

る、いとみじう聞ゆ。北の御さうじと、御帳とのはさまいと狭きほどに、四十餘人ぞ後に數ふれば居たりける。いささかみじろぎもせられず、氣あがりてものぞ覺えぬや。今、さとよりまゐる人々はなかく居籠められず。裳の裾、衣の袖ゆづらむかたも知らず、さるべきおとななどはしのびてなきまどふ。

### 七 御受戒

十一日の曉に、北の御障子二間はなちて、廂にうつらせ給ふ。御簾などもえかけあへねば、御几帳をおし重ねておはします。僧正ぎやうてふ、僧都、法務僧都などさぶらひて、加持まゐる。院源僧都、きのふかかせ給ひし

御願書にいみじきことども書き加へて、讀みあげ續けたる言のはの、あはれにたふとく頼もしげなる事限りなきに、殿のうちそへて佛念じ聞え給ふほどのたのもしく、さりともとは思ひながら、いみじうかなしきに、人々なみだをえほしあへず、「ゆゆしうかう」などかたみにいひながらぞ、えせきあへざりける。  
人げおほくこみては、いとど御心地も苦しうおはしませらむとて、南面東おもてに出ださせ給ひて、さるべき限りこの二間のもとにはさぶらふ。殿の上、さぬきと、宰相の君、内藏の命婦、御几帳の内に、仁和寺の僧都の君、三井寺の内供の君も召し入れたり。殿のよろづにのしらせ給ふ御聲に僧もけたれて音せぬやうなり。いま



皇の仁和二年勅願により起  
 工、宇多天皇四年落成。  
 此時の僧都は不明、但し榮  
 華物語には一僧正孔叡の榮  
 御修法を行ふとあり。僧  
 正なれば、教實親王の御子  
 慶なり。近江國大津市の西  
 一井にあり。圓城寺(チンツ  
 ヤウジ)といふ。天台宗。  
 弘文天皇の遺勅により天武  
 天皇の二年延暦寺の僧圓珍  
 より歸り修造す。内供と唐  
 僧の名にて、宮中内道  
 場(二)に供奉するより此の名  
 あり。二女房の呼名なれど元立  
 一執り傳へたる女房を呼ぶ。  
 三もしも、當時は御侍妻の稱  
 となす。此所にては道長の  
 二女研子。後三條天皇の皇  
 后。その乳母なる中務のめ  
 のとなり。三女威子、後に  
 一後一條帝の皇后。後に  
 五道長の四女。皇子。幼少  
 後朱雀帝の后宮。いと幼少

一座にゐたる人々、大納言の君、小少將の君、宮  
 の内侍、辨の内侍、中務の君、たいふの命婦、大  
 式部のおもと、殿の宣旨(二二)よ。いと年經たる人々の  
 かざりにて、心まどはしたるけしきどもの、いと  
 ことわりなるに、ただ見奉りなるるほどなりけれ  
 ど、たぐひなくいみじと、心ひとつに覺ゆ。  
 また、このうしろのきはに立てたる几帳の外に、  
 内侍(二三)のかみの中務のめのと、姫君の少納言のめ  
 と、いとひめ君の小式部のめのとなどおし入り來  
 て、御帳二つがうしろの細道をえ人もとほらず、  
 行きちがひ、みじろぐ人々はその顔なども見わか  
 れず。殿の公達、宰相の中將(二四)兼隆、四位の少將(二五)雅

の姫君の意なり。

一六 中宮職長官齊信。

一七 魔鬼を拂ふまじないに  
 散米するが頭にかゝりたる  
 なり。

一八 佛弟子となるしるし  
 と。形ばかり御髪を削るこ  
 一九 受戒の作法、佛の戒律  
 を守ることを誓ひて、安靜  
 を得られむ爲なり。此の時  
 直に居になり給ふにあらざ  
 なり。後の入道を誓はれし  
 二〇 安産せられたるなり。  
 一 後産のこと。

通(二六)などをばさらにもいはず、左の宰相の中將(二七)兼隆、  
 宮の大夫など、れいはけどほき人々さへ御几帳の  
 かみよりともすればのぞきつつ、腫れたる目ども  
 を見ゆるも、よろづ恥わすれたり。いたゞきには  
 うちまきの雪のやうにふりかゝり、おししほみた  
 る衣のいかに見ぐるしかりけむと、後にぞをか  
 一八 御いたゞきの御ぐしおろし奉り、御いむこと受  
 けさせ奉り給ふほど、くれ惑ひたるる心地に、こ  
 はいかなる事とあさまじうかなしきに、たひらか  
 にせさせ給ひて、後のことまだしきほど、さばか  
 りひろき身屋の南の廂、勾欄のほどまでたちこみ

たる僧も俗も、いまひとよりとよみて額をつく。

「ひんがし面なる人々は、殿上人に交りたるやうにて、小中將の、左の頭の中將に見合せてあきれたりしさまを、後にぞ人々いひ出でて笑ふ。けさうなどのたゆみなくなまめかしき人にて、曉に顔つくりしたりけるを、なきはれ、涙にところくぬれそなはれて、あさましろ、其の人となん見えざりし。宰相の君の、かほがはりし給へる様などこそいと珍らかに侍りしか。まして、いかなりけむ。されどそのきはに見し人のありさまのかたみに覚えざりしなにかしこかりし。

今とせさせ給ふほど、御物怪のねたみのしる聲などのむくつけさよ。源の藏人には心譽阿闍梨、兵衛の藏人には、そうそといふ人、右近のくら人には、ほうぢうじの律師、宮の内侍の局にはちそうあざりを預けたれば、物怪に引きたふされて、いといとほしかりければ、ねんがく阿闍梨を召し加へてぞのしる。阿闍梨の驗のうすきにあらず、御ものけのいみじうこはきなりけり。宰

相の君のをぎ人にゑいかうをそへたるに、夜一よののしりあかして聲もかれにけり。御物怪うつれと、召しいでたる人々も、皆うつらで騒がれけり。

### 八朝日の光

午の時に、空はれて朝日さし出でたる心地す。平らかに  
おはします嬉しさのたぐひもなきに、をのこにさへお  
はしましける悦び、いかがはなのめならむ。昨日しをれ  
くらし、今朝のほど朝霧におぼほれつる女房など、皆立  
ちあかれつつやすむ。御前には、うちねびたる人々の、  
かかるをりふしつきぐしきさぶらふ。殿も上もあなた  
に渡らせ給ひて、月ごろ御修法御讀經にさぶらひ、昨日  
今日召しにて参りつどひつる僧の布施給ひ、くすし、陰

財物を普く施すの意。此處  
 二一 給與の品にて大かたは  
 二二 絹類の品なり。  
 二三 初湯の儀式。  
 二四 婦人の禮服にて上着の  
 二五 袖丈と同じく、前後は短  
 二六 唐草など種々繻をした  
 二七 結び飾りとするなり。  
 二八 織物の中に青貝をぬひ  
 二九 齊信。  
 三〇 春宮坊の長官、藤原頼  
 三一 宗。

二九 參議右近衛中將藤原兼  
 三〇 隆。  
 三一 俊賢。  
 三二 對屋の縁側。  
 三三 皇子誕生の際天皇より  
 三四 御劍を贈り賜ふ例あり。  
 三五 螺鈿の飾刀にて錦の袋に  
 三六 入る。  
 三七 藏人頭近衛中將。  
 三八 伊勢大神宮への奉幣  
 三九 使。  
 四〇 上かへるまではの意。  
 四一 所に上りて見れば、此の  
 四二 天にかけ幸の條にも、頭中  
 四三 將に佩刀たり。頼定が奉幣使  
 四四 由見たり。頼定が奉幣使  
 四五 立つと、關根博士の説  
 四六 七よろしからず。  
 四七 儀式、御乳つけは橋の  
 四八 三位、御考、御乳つけは橋の  
 四九 位、御考、御乳つけは橋の  
 五〇 三の位、御考、御乳つけは橋の  
 五一 朝臣の娘と、即ち藏人守宗時  
 五二 選ばれたるに非るか。

陽師など、道々のしるし顯はれたる、<sup>(三三)</sup>祿賜はせ、  
 うちには、<sup>(三四)</sup>御湯殿の儀式などかねてまうけさせ給ふ  
 べし。人の局局には、大きやかなる袋、つつみど  
 も持てちがひ、<sup>(三五)</sup>唐衣、ぬひものの裳引き結び、<sup>(三六)</sup>螺  
 鈿ぬひ物怪しからぬまでしてひきかくし、「扇もて  
 來ぬか。」など言ひかはしつけさうじつくるふ。  
<sup>(三七)</sup>例の渡殿より見やれば、妻戸の前に、宮の大夫、  
<sup>(三八)</sup>春宮の大夫など、さらぬ上達部もさぶらひ給ふ。  
 殿出でさせ給ひて、日頃埋もれつる遣り水つくる  
 はせ給ひ、人々の御氣色ども心地よげなり。心の  
 うちに思ふことあらん人も、唯今はまぎれぬべき  
 世のけはひなる中にも、宮の大夫、ことさらにも

笑み誇り給はねど、人よりまさる嬉しさのおのづ  
 から色に出づるぞことわりなる。<sup>(三九)</sup>右の宰相中將は  
<sup>(四〇)</sup>權中納言と戯れして對の簀子に給へり。内より  
<sup>(四一)</sup>御佩刀持て参れり。頭の中將頼定。今日伊勢のみ  
 てぐらつかひ歸るほど、<sup>(四二)</sup>のぼるまじければ、立ち  
 ながらぞ、たひらかにおはします御有様奏せさせ  
 給ふ。祿なども給ひける。その事は見ず。  
<sup>(四三)</sup>御臍の緒は殿の上。御乳つけは、橋の三位徳子。  
<sup>(四四)</sup>御めのと、もとよりさぶらひ、睦まじう心よい方  
 とて、大左衛門のおもと仕うまつる。備中守宗時  
 の朝臣のむすめ。藏人の辨のめのと。  
<sup>(四五)</sup>御湯殿は酉の時とか。火ともして、宮の下部、



五ハ士なり。五帝本紀の章。黄帝者少典之子、姓公孫、名曰軒轅、生而神靈、弱而能言、幼而徇齊、長而敦敏、成而聰明、治五氣、藝五種、撫萬民、立憲、侯成、尊軒轅、爲天子。の條を三遍よむ例なり。

五九 鳴弦とて弓に矢を矧げずして弦のみ引き放して鳴らす。射術家の秘法に於て、魔鬼を退治するまじなひにみならず、常の御湯浴にも行はる。

六〇 儀式の様、うち重なりて同じといふこと。

六一 中原氏。明經博士。

六二 「愛親者不敬、惡於人、蓋天子之孝也」の條を三遍讀む。

六三 大江氏。文章博士。

よさりの御湯殿とても、<sup>(六〇)</sup>様ばかりしきりてまゐる、<sup>(六一)</sup>儀式同じ。御ふみの博士ばかりやかはりけむ、<sup>(六二)</sup>伊勢守致時の博士とか。例の孝經なるべし。<sup>(六三)</sup>又舉周は史記の文帝の卷を讀むなるべし。

七日のほどかはるぐ、よろづの物のくもりなく、白きおまへに、人のやうだい、色あひなどさへ、けちえんにあらはれたるを見わたすに、よき墨繪に髪どもをおふしたるやうに見ゆ。いとどはしたなくて、かがやかしき心地すれば、晝はをさくさしいです、のどやかにて、ひんがしのたいの局より、まうのぼる人々を見れば、色聽されたるは織物の唐衣、同じ袿どもなれば、なかなかうるはしくて心々も見えず。聽されぬ人も、少しおとなびたるはかたはらいたかるべき事はせで、唯えならぬ三重五重の袿に、上着は織もの、無紋の唐衣すくよかにして、重ねには綾うすものをしたる人もあり。扇など見るには、おどろくしくかゞやかさで、よしなからぬ様にしたたり。心ばへある本文うちか

きなどして、言ひ合せたるやうなるも、心々と思ひしかども、よはひの程、同じまちは、をかしと見かはしたり。人の心のおもひおくれぬけしきぞあらはに見えける。裳、唐衣の縫ひものをばさることにて、袖口におきくちをし、裳の縫目に白がねの糸をふせて綬のやうにし、箔を飾りて綾の紋にする、扇どもの様などは、ただ雪深き山を、月のあかきに見わたしたる心地しつゝ、きらきらとそこはかと見わたされず、鏡をかけたるやうなり。

三日にならせ給ふ夜は、宮づかさ、大夫よりはじめて、御産やしなひつかうまつる。右衛門督は御前の事、沈の懸盤、しろがねの御皿など、くはしくは見ず。源中納言藤宰相は、御衣、御むつき、衣笥の折立、入れ惟子、つつみおほひ、したづくゑなど、同じことの同じ白きなれども、しさま人のところどころ見えつつしつしたり。近江守たかまさは、大かたのことどもやつかうまつらむ。東の對の西の廂は上達部の座、北を上にて二行に、南の廂に殿上人の座は西を上なり。白き綾の屏風どもを、身屋の御簾にそへて、外さまに立てわたし



七 女房達が一常の意を補ひて解釋す  
 八 選ばれたる人々  
 九 餅の供する菓  
 一〇 地方郡領の  
 一 女官の勤むる  
 二 後宮十二司  
 三 雑司の勤むる  
 四 掃司の勤むる  
 五 除高に屬する  
 六 女官の勤むる  
 七 奥向の御門の鍵  
 八 俗に服の間  
 九 藤の女官共の  
 一〇 上りて山さら  
 一 髪をかく  
 二 理髪人の多く

木工の巫平のぶよしと。かたちなどをかきわかうどの限りに  
 いひけむ人の女なり。かたちなどをかきわかうどの限りに  
 て、さし向ひつつ居渡りしはいと見るかひこそ侍りしか。  
 例はおものまゐるとて、髪(七)あぐることをぞするを、かか  
 るをりとしてさりぬべき人々をえらせ給へりしを、心うし、  
 いみじと、うれ(八)へ泣きなど、ゆゆしきまでぞ見侍りし。  
 御帳のひんがしおもて二間ばかりに、三十餘人ゐなみ  
 たりし人々のけはひこそ見ものなりしか。(九)いぎのおもの  
 は采女(一〇)どもまゐる。戸口のかたに、御湯殿のへだての御  
 屏風にかさねて、又南向に立てて、白き御厨子一雙(一一)にま  
 ゐりすゑたり。  
 夜ふくるまゝに月の隈なきに、采女(一二)、もひとり、(一三)みぐ  
 しあげども、(一四)とのもり、(一五)かんもりの女官、顔も知らぬを

り。(一五)みかどつかさなどやうのものにやあらむ、おろそか  
 にさうぞきけさうじつつ、おどろのかんざし(一六)おほやけお  
 ほやけしきさまして、寢殿のひんがしの廊、渡殿の戸口  
 までひまもなくおしこみてゐたれば、人もえとほりかよ  
 はず。  
 おものまゐりはてて、女房御簾のもとにいで居たり。  
 火影にきら／＼と見えわたる中にも、大式部のおもとの  
 裳、唐衣、をしほ山の小松原をぬひたるいとをかし。大  
 式部は、陸奥の守の妻、殿の宣旨よ。たいふの命婦は、  
 唐衣は手もふれず、裳を白がねの泥(一七)して、いとあざやか  
 に大海にすりたるこそけちえんならぬものから、めやす  
 けれ。辨の内侍の裳に、しろがねの洲濱、鶴をたてたる

一七 洲濱に鶴の模様が配り、松が枝を配して、互に長壽の吉瑞を争ひ比べふ。  
 一八 土御門殿の古参者。  
 一九 夜中護身の僧のために勤仕する。

二〇 護身の爲に祈念する不動明王か。

二一 雙六の遊戯に於て、當時は賭物として紙を出したり。攤は

しざまめづらし。(一七)ぬひものも松が枝の齡をあらそはせたる心ばへかどくし。少將のおもとの、これらには劣りたるしろがねの箔を人人つきじろふ。少將のおもといふは、信濃の守すけみつが妹、殿の(一八)ふる人なり。その夜の御前のありさまの、いと、人に見せまほしければ、(一九)夜の居の僧のさぶらふ御屏風をおしあけて、「この世には、かうめでたきことまだえ見給はじ。」と、いひ侍りしかば、あなかしこくと、(二〇)本尊をばあきて手をあしすりてぞ喜び侍りし。

上達部座をたちて、御階の上に参り給ふ。殿をはじめ奉りて攤(二一)うち給ふ。紙のあらそひいとまさなし。歌どもあり。「女房さかづき、」などあるをり、いかゞはいふべき

「ダ」といふ。

二二 藤原公任、詩、歌、管絃の道に長じて、人々長敬したり。  
 二三 「歌は歌として、もとより、詞遺ひも」の意か。  
 二四 「盃をささ」で「にてはなくして」の名をささずむと「の意ならむ」と根博士はいへり。

など口口思ひこころみる。

めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代もめぐらめ

(二二)四條中納言にさしいでむほど、(二三)歌をばさるものにて、こわづかひ、よう言ひ述べじなどさゞめき争ふほどに、こと多くて、夜いたう更けぬればにや、とりわきても(二四)さでまかで給ふ。祿ども、上達部には女のさうぞくに御衣、御むつきやそひたらむ。殿上の四位は、あはせ一かさね、六位は、はかま一具ぞみえし。

又の夜、月いとおもしろく、ころさへをかしきに、わかき人は舟に乗りて遊ぶ。色々なるをりよりも、同じさまにさうぞきたるやうだい、かみのほど、くもりなく見ゆ。小大輔、源式部、宮木の侍従、五せちの辨、右近、小兵衛、小



衛門、うま、やすらひ、いせ人などはしちかく居たるを、左の宰相の中將、殿の中將の君誘ひいで給ひて、右の宰相の中將兼隆に、棹ささせて、舟にのせ給ふ。かたへは、すべりとどまりて、さすがにうらやましくやあらむ、外見出だしつつゐたり。いと白き庭に月の光りあひたるやうだいかたちもをかしき様なり。北の陣に、車あまたありといふは、うへ人どもなりけり。藤三位をはじめにて、侍従の命婦、藤少將の命婦、うまの命婦、左近の命婦、筑前の命婦、近江の命婦などぞ聞え侍りし。くはしく見しらぬ人々なれば、ひがごとも侍らむかし。舟の人々もまどひ入りぬ。殿、いでぬ給ひて、おぼすことなき御けしきに、もてはやしたはぶれ給ふ。おくり物ども、しな／＼に給ふ。

一〇 おほやけの御産養

七日の夜は、<sup>(二)</sup>おほやけの御産養。藏人の少將道雅を御

一 天皇のことな

二 柳を三角に割  
りたる宮合せ作  
りたる左大臣藤  
原冬嗣が藤氏の  
子弟を習せしめ  
たる學校に衆と  
はたる學校の長  
當時藤氏の長者  
の家慶の別當は  
學生院の別當は  
賀儀を表すべく  
歩み來るを例と  
し、之れを勸學  
院のあゆみとい  
へり。  
四 見参即ち参賀  
する各人の連名  
書す。  
五 皇后のこと。

使にてももの數々書きたる文、<sup>(三)</sup>やないばこに入れて参れり。やがて返したまふ。<sup>(三)</sup>勸學院の衆どもあゆみしてまゐれる、<sup>(四)</sup>げさんのふみどもまた啓す。かへしし給ふ。祿どもたまふべし。こよひの儀式は殊にまさりておどろ／＼しくののしる。御帳の内をのぞきまゐりたれば、かく國<sup>(五)</sup>の親ともてさわがれ給ひ、うるはしき御けしきにも見えさせ給はず、少しうちなやみおもやせて、おほとのごもれる御有様、常よりもあえかにわか美しげなり。小さき燈籠を御帳の内にかけたれば、隈もなきに、いとゞしき御色合のそこひも知らずきよらなるに、こちたき御ぐしはゆひてまさらせ給ふわざなりけりと思ふ。かけまくもいとさらなれば、えぞ書きつゞけ侍らぬ。大かたの事

七 天皇よりの御  
 祿は、特に人々  
 に賜ふ爲に大き  
 く縫ひ上げたる  
 袷、夜着、巻きた  
 るまよの紐を賜  
 はせたりとな  
 り。  
 袷は男子の直  
 衣、婦人の唐衣  
 の下に着る衣、  
 ふすまは袖首な  
 く、茵の如きもの  
 にて、へりをと  
 らず。夜着なり。  
 八 小袷の上に着  
 る女服。

どもはひと日のおなじこと、上達部の祿はみすのうちよ  
 り、女装束、宮の御衣など添へて出す。殿上人、頭二人  
 をはじめて寄りつとる。おほやけの祿は、<sup>(七)</sup>おほうちき、  
 ふすま、腰差など、れいのおほやけざまなるべし。御乳  
 づけ仕うまつりし橘の三位の贈り物、例の女のさうぞく  
 に、織物の細長添へて、しろがねの衣宮、つゝみなども  
 やがて白きにや。又包みたる物、添へてなどぞ聞き侍り  
 し。委しくは見侍らず。

八日、人々、いろ／＼さうぞきかへたり。

九日の夜は、春宮の權の大夫つかうまつり給ふ。白き御厨子ひとよろひに、  
 まわりすゑたり。儀式、いと様ことにいまめかし。白がねの御衣宮、海浦をう  
 ちいでて、蓬萊など例のことなれど、いまめかしうこまかにをかしきを、とり

はなちてはまねびつくすべきにもあらぬこそわろけれ。今宵はおもて朽木形の  
 几帳、れいのおさまにて、人々は濃きうちものを上に着たり。めづらしく心に  
 くなまめいて見ゆ。すきたる唐衣どもに、つや／＼とおしわたして見えたるを  
 また人の姿もさやかにぞ見えなされける。こまのおもといふ人の恥見侍りし  
 夜なり。

一一 うつくしみ

十月十餘日まで御帳出でさせ給はず。西のそばなるお  
 ましに夜も晝もさぶらふ。殿の夜中にも曉にも参り給ひ  
 つつ、御めのとの懷をひきさがさせ給ふに、うちとけて  
 寝たる時などは、何心もなくおほほれておどろくも、い  
 といとほしく見ゆ。心もとなき御ほどを、わが心をやり  
 てささげうつくしみ給ふもことわりにめでたし。或時は

一 直衣の領を結ぶ入れ紐。

一 掘ること、花のひたして根とひたす。二 掘り来り合ふこと、は、映るなり。

三 色すくはるるに。四 下の一常なき。五 少しにても。六 清水宜昭の釋

わりなきわざしかけ奉り給へるを、御紐ひき解きて、御几帳の後にてあぶらせ給ふ。「あはれ、この宮の御しとに滞るるはうれしきわざかな。これぬれたるあぶること思ふやうなる心地すれ。」と、よろこばせ給ふ。

中務の宮わたりの御事を御心にいれて、そなたの心よせある人とおぼして、かたらはせ給ふも、まことに心の中は思ひゐたること多かり。

二二 二 みゆき

行幸近くなりぬとて、殿の内をいよく造りみがかせ給ふ。世にももしろき菊のねをたづねつつほりてまゐる。いろくうつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまぐくに植ゑたてたるを、朝霧の絶間に見わたしたるは、

げに老いもしぞきぬべき心地するに、なぞや。ましておもふことの少しもなめなる身ならましかば、すきくしくももてなし若やぎて、常なき世をもすぐしてまし。めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くてもものうく、おはずに、歎しきことのまさるぞいと苦しき。いかで今はなほ物忘れしなむ。思ひがひもなし。罪も深かりなど、明けたてばうちながめて、水鳥どものおもふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥をみづのうへとやよそにみむ我れも浮きたる世をすぐしつつかれもさこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいとくる

